

# 東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

— 平成23年度 —

2012. 3

東大阪市教育委員会

## は し が き

東大阪市は、大阪府の東部、奈良県に隣接し、生駒山の懷に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

生駒山地のふもとは、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。本市ではこれら遺跡・埋蔵文化財を保護、顕彰する立場から昭和47年に文化財課と郷土博物館を設置、開館しました。考古資料を展示する登録博物館としては大阪市に次ぎ、府下の衛星都市としては初めてであり、府下市町村の博物館施設の先駆けとなりました。平成14年11月には市立埋蔵文化財センターがオープンし児童や生徒、多くの市民に広く利用され、文化財の活用と普及に努めてまいりました。

本書では、平成23年度国庫補助事業による発掘調査の成果を報告します。今回の報告では、花草山古墳群・瓜生堂遺跡・新上小阪遺跡・上六万寺遺跡の調査、整理概要を掲載しています。いずれも遺存状態の良好な遺構・遺物に恵まれ、既往の調査成果に新たな知見を加えることができました。限られた調査範囲ではありますが、各々の地域史の解明に大きく寄与できたものといえます。

これらは次世代に引き継ぐべき貴重な考古資料であり、本書が埋蔵文化財保護の報告書としてだけでなく、文化財の普及啓発冊子として市民の方々に広く読まれることを期待します。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、個人・関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成24年3月

東大阪市教育委員会

# 目 次

はしがき

目次・例言

第1章 平成23年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要	1
第2章 花草山古墳群第3次発掘調査	5
第3章 瓜生堂遺跡第57次発掘調査	19
第4章 新上小阪遺跡第2次発掘調査	49
第5章 上六万寺遺跡第12次発掘調査	53

# 例 言

- 1 本書は、国庫補助50%・市負担50%(総額12,000,000円)で実施した、個人及び零細事業主施行による開発工事に伴う発掘調査ほかの概要報告書である。
- 2 本発掘調査は、調査原因に係る個人および法人の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
- 3 現地の上色および土器の色調は農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準十色帖』に準拠し、記号表示も同書に従った。
- 4 現地で出土した遺物の整理については、株式会社地域文化財研究所に委託のうえ、実施した。
- 5 本書の執筆は次のとおりである。  
第1章、第5章1)～3)・5)は竹林篤史、第2章1)～3)・5)、第3章1)～3)・5)は若松博恵、第2章4)・第3章4)・第4章3)・第5章4)は松田直子(株式会社地域文化財研究所)、その他の章項及び編集は菅原幸太。
- 6 考古学用語については、佐原真・田中琢『日本考古学事典』(2002年)の表記に従った。
- 7 現地調査の実施及び報告書作成にあたり、ご協力いただいた地権者の方々や関係諸機関に対し厚くお礼申し上げます。

## 第1章 平成23年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要

平成23年度の文化財保護法第93条及び第94条に基づく埋蔵文化財包蔵地での届出(通知)件数は、平成24年2月29日現在で届出447件、通知23件で合計470件である。届出(通知)にかかる工事内容の内訳は次のとおりとなる(0件の工事名は省く)。

個人住宅 100件 分譲住宅 186件 共同住宅 21件 その他住宅 7件 工場 1件  
店舗 5件 その他建物 33件 道路 1件 学校 4件 宅地造成 13件  
ガス 46件 水道 9件 下水道 39件 電話通信 4件 その他の開発 1件

470件の届出(通知)の指導内容は、発掘調査48件、工事立会109件、慎重工事313件であった。

平成20年度では届出(通知)が427件、平成21年度が441件、平成22年度が445件であったことから、わずかではあるが平成20年度以降の工事件数が増加していることがうかがわれる。

東大阪市教育委員会では、次ページ・一覧表のとおり、個人専用住宅建設に伴う確認調査及び発掘調査、個人による福祉施設建設に伴う確認調査、個人施行の貯留施設設置に伴う発掘調査、個人施行の共同住宅建設に伴う確認調査を平成23年度国庫補助事業として実施した。

その内容は、個人専用住宅建設に伴う確認調査が9件、個人専用住宅建設に伴う発掘調査が4件、国史跡整備に伴う発掘調査が1件、個人による福祉施設建設に伴う確認調査が1件、個人施行の貯留施設設置に伴う発掘調査が1件、個人施行の共同住宅建設に伴う確認調査が4件で、合計20件である。昨年度が18件であったことと比べると、件数は横ばいである。また、確認調査で遺物包含層又は遺構等を確認したものの、大阪府の基準に合致する設計変更により工事を実施したものが3件あった。

平成23年度の国庫補助事業でも、例年と同様、個人専用住宅建設に伴って実施する確認調査の件数が多数である。これらは、基礎工事に地盤改良工事又は柱状改良工事等を伴うことによるもので、埋蔵文化財への影響が考えられることから、国庫補助事業として確認調査を行い、埋蔵文化財保護行政等に必要データを得ているところである。

次に、平成23年度で調査成果を得つつ発掘調査に至らなかった確認調査事例を報告しておきたい。

次ページ表のNo.6、No.10及びNo.15は、それぞれ確認調査において、遺物、遺物包含層又は遺構を確認したものである。No.6の土六万寺第12次発掘調査は第5章で報告を行う。No.10の市況遺跡では、GL-0.2mから-0.8mで古墳時代から中世にかけての土器を含む遺物包含層を確認した。No.15の上六万寺遺跡確認調査では、GL-0.7mから-1.2mで、古墳時代及び中世期の遺物包含層を確認した。それぞれ、埋蔵文化財に影響を与えないような基礎設計に変更のうえ、大阪府の基準に合致する杭工事の設計に変更し、工事実施に至ったものである。

最後に、詳細は次年度の報告となる調査事例を2例報告しておく。

まず、No.14の西ノ辻遺跡第49次発掘調査では、確認調査により古墳時代の遺物包含層及び溝状の遺構を検出したため、発掘調査を実施した。調査の結果、試掘トレンチより東側地点で、GL-0.2mという非常に浅い地点で、古墳時代の遺物包含層を確認した。

No.19の若江遺跡第86次発掘調査では、GL-0.6mから-1.4mで室町時代後期から近世にかけての整地層を確認した。出土した遺物には、弥生土器片、古墳時代の須恵器片、二次焼成を受けた奈良・平安時代から室町時代にかけての瓦片、サヌカイト片等が含まれた。同遺跡が室町時代後期から近世にかけて大規模な整地を繰り返した跡が窺われる結果となった。

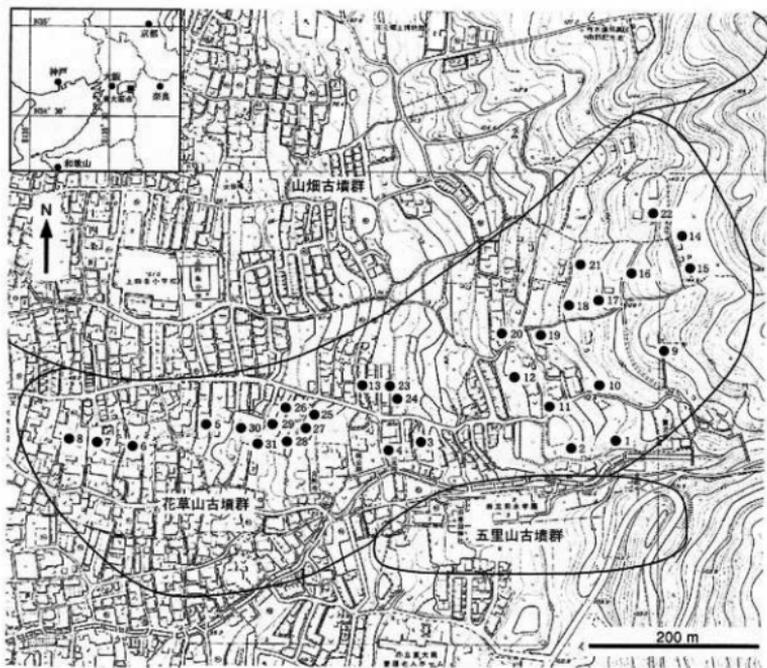
## 平成23年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況

調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
1 瓜生堂遺跡第57次発掘調査 (個人施行の貯留施設設置 工事)	東大阪市瓜生堂一丁目34番 4、34番6、204番及び205番	古松	平成23年7月14日～ 平成23年8月12日	165㎡	古墳時代～鎌倉時代の土師器、 酒器等の土器が出土。古墳時 代、奈良時代、鎌倉時代の土坑、 ピット、耕作跡等の遺構を確認。 本書第3章。
2 山百遺跡確認調査 (個人その他建物)	東大阪市南上小阪531番1	菅原	平成23年7月22日	4㎡	GL-1.9mまで確認。埋蔵文化財 検出せず。工事実施。
3 小若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	東大阪市小若江二丁目307 番4、307番5の一部	菅原	平成23年7月26日	2㎡	GL-1.5mまで確認。埋蔵文化財 検出せず。工事実施。
4 瓜生堂遺跡確認調査 (個人専用住宅)	東大阪市下小阪四丁目39番 7の一部	菅原	平成23年8月4日及び 平成23年8月11日	1㎡	GL-1.5mまで確認。中世の遺物 包含層を確認。工事実施。
5 辻子谷遺跡確認調査 (個人専用住宅)	東大阪市中石切町二丁目 210番26及び212番1	仲林	平成23年8月26日	2㎡	GL-1.8mまで確認。土師器片が 少量出土。工事実施。
6 上六万寺遺跡第12次発掘 調査 (個人施行の共同住宅)	上六万寺町1967番1	仲林	平成23年9月22日	5㎡	GL-1.0mより弥生時代後期の 土器及び土器片が出土。設計変 更により工事実施。 本書第5章。
7 若江遺跡確認調査 (個人施行の共同住宅)	若江南町一丁目671番6	仲林	平成23年10月4日	5㎡	GL-2.1mまで確認。検出した地 層に遺物含まず。工事実施。
8 山瀬内遺跡確認調査 (個人専用住宅)	瓢箪山町49番3	仲林	平成23年9月26日	3㎡	GL-2.0mまで確認。検出した地 層に遺物含まず。工事実施。
9 辻子谷遺跡確認調査 (個人専用住宅)	東石切町五丁目297番11	仲林	平成23年10月31日	3㎡	GL-1.6mまで確認。二次地積に よる土師器片が出土。工事実施。
10 市尻遺跡確認調査 (個人施行の共同住宅)	四条町585番6 外6筆	仲林	平成23年11月4日	5㎡	GL-0.2mより中世の整地層及 び土器片を確認。設計変更によ り工事実施。

	調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
11	宮ノ下遺跡確認調査 (個人施行の共同住宅)	長堂一丁目H57番1の一部	仲林	平成23年11月9日	9㎡	GL-0.7mより中世以降の二次堆積層を確認。工事実施。
12	美園遺跡確認調査 (個人専用住宅)	友井田丁目919番1の一部、 919番3の一部	仲林	平成23年11月18日	3㎡	GL-1.3mより弥生時代後期から近世にかけての土器片を含む耕地面を確認。工事実施。
13	芝ヶ丘遺跡確認調査 (個人専用住宅)	北石切町1850番36	仲林	平成23年12月19日	3㎡	GL-1.5mまで確認。検出した地層に遺物含まず。工事実施。
14	西ノ辻遺跡第49次発掘調査 (個人専用住宅)	弥生町1278番9	仲林	平成23年12月20日・ 21日	8㎡	古墳時代～中世期の遺物包含層及び土器片を抽出。詳細は次年度報告予定。
15	上六万寺遺跡確認調査 (個人専用住宅)	南田赤町991番13	仲林	平成24年1月10日	3㎡	GL-0.7mより中世期の遺物包含層、GL-0.95mより古墳時代の遺物包含層を確認。設計変更により工事実施。
16	西ノ辻遺跡第50次発掘調査 (個人専用住宅)	弥生町1291番11、1293番10	仲林	平成24年1月24日・ 30日	7㎡	GL-1.45mより弥生時代から古墳時代にかけての遺物包含層及びピット状の遺構を確認。協議により発掘調査を行い、古墳時代の遺物包含層及び柱穴を確認。詳細は次年度報告予定。
17	山畑古墳群第32次発掘調査 (個人専用住宅)	客坊町985番12、13	仲林	平成24年1月25日・ 31日、2月1日	12㎡	中世期の遺物包含層を確認。詳細は次年度報告予定。
18	若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江本町二丁目68番1の一部	仲林	平成24年2月10日	3㎡	盛土内で、中世期の土器片及び前遺物による段差を受けたと見られる段地層の一部を確認。工事実施。
19	若江遺跡第86次発掘調査 (個人専用住宅)	若江本町四丁目926番の一部	仲林	平成24年2月20日・ 22日、23日	7㎡	非土器、須恵器、奈良・平安時代～室町時代の瓦等を含む遺物包含層を確認。詳細は次年度報告予定。
20	河内寺庵寺跡第21次発掘調査 (史跡整備に伴う内容確認)	河内町441番、442番、 443番1、443番2	仲林	平成24年3月12日 調査着手	140.5㎡	基壇の乱石積状況、埋地内面の確認のための調査。詳細は別途報告予定。







第2図 花草山古墳群古墳分布図（文献9より）

<文献>

1. 『枚岡市史』第1巻 本編 枚岡市役所 1967年、「古墳時代の枚岡」
2. 『枚岡市史』第3巻 史料編1 枚岡市役所 1966年、「考古資料 古墳時代」
3. 『河内四條史』第1冊 本編 四條史編さん委員会 1981年、「古代の四條」
4. 『河内四條史』第2冊 史料編1 四條史編さん委員会 1977年、「考古資料 古墳時代」
5. 『東大阪遺跡ガイド』 東大阪市遺跡保護調査会 1978年
6. 「花草山23・24号墳発掘調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要 - 昭和62年度 -』 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要29 東大阪市教育委員会 1988年
7. 『わが街再発見 東大阪市の古墳』 東大阪市教育委員会 1996年、改訂版 2001年
8. 秋山浩三・池谷梓「五里山古墳群・花草山古墳群と採集資料の検討 - 生駒山西麓部における群集墳の形成過程等をめぐって -」『大阪府文化財研究』第19号 財団法人大阪府文化財調査研究センター 2000年
9. 「宅地造成に伴う花草山古墳群第2次発掘調査報告書 - 29・30・31号墳 -」 財団法人東大阪市文化財協会 2003年
10. 『わが街再発見 東大阪市文化財ガイドブック』 東大阪市教育委員会 2008年
11. 『わが街再発見 東大阪市の歴史と文化財』改訂版 東大阪市教育委員会 2009年
12. 『わが街再発見 東大阪市の遺跡ガイドブック』 東大阪市教育委員会 2010年

第1表 花草山古墳群古墳一覽表

号	墳丘	主体部	主体部規模(現状)	埋葬状況	出土遺物他	文献	現状
1	不明	不明	--			4、7	埋没
2	不明	横穴式石室	不明			4、7	半壊
3	不明	横穴式石室	不明			4、7	半壊
4	不明	横穴式石室	不明		須惠器	4、7、8	消滅
5	不明	横穴式石室 ・右片袖	玄室長3.6m 羨道長4.2m			4、5、7、8	半壊
6	不明	不明	--			4、7	消滅
7	不明	不明	--			4、7	消滅
8	不明	不明	--			4、7	消滅
9	不明	不明	--			4、7	消滅
10	不明	横穴式石室 ・左片袖	玄室長8.05m 羨道長3.04m	土師器甕		4、5、7、8	保存
11	不明	不明	--			4、7	消滅
12	不明	不明	--			4、7	消滅
13	不明	不明	--			4、7	消滅
14	不明	横穴式石室	不明			4、7	半壊
15	経塚 円墳 径15m、 高3m	横穴式石室 ・右片袖	玄室長4.2m 羨道長4m			2、4、7、8	保存
16	鉢伏 塚 東西15m、 高3.5m	横穴式石室 ・右片袖	玄室長4.9m 幅1.9m 羨道長3.9m 幅1.7m		須惠器 埴丘・須惠器 大甕・平瓶	2、4、5、7、8	調査 保存
17	不明	不明	--			4、5、7	消滅
18	不明	不明	--			4、7	消滅
19	不明	横穴式石室 ・右片袖	玄室長1.8m(残) 羨道幅1.2m、高1.2m 比.m(残)		須惠器、刀子、 矢	4、7、8、 小書	調査 埋没
20	不明	横穴式石室	不明	組合式石棺		4、7、8	半壊
21	不明	不明	不明			4、7	半壊
22	円墳	横穴式石室	玄室長4.9m			7	半壊
23	不明	横穴式石室 ・無袖	全長6.8m		須惠器、土師 器、武器、工 具、鉄釘	6、7、8	調査 埋没
24	不明	小竪穴式石室	土坑内法長1.3m	土師器甕	須惠器、土師 器	6、7、8	調査 埋没
25	不明	不明	--			7	埋没
26	不明	不明	--			7	埋没
27	不明	不明	--			7	埋没
28	不明	横穴式石室	不明	組合式石棺	須惠器、土師 器、武器	7、8	調査 埋没
29	不明	横穴式石室 ・右片袖	玄室長2.8m 幅1.4m 羨道長4.9m		須惠器、土師 器、耳環、鉄 釘	7、9	調査 消滅
30	不明	横穴式石室 ・右片袖	玄室長4.6m 幅2m 羨道長7m以上 幅1.7~1.9m		須惠器、耳環、 玉類、鉄釘	7、9	調査 消滅
31	不明	横穴式石室	不明		須惠器、馬具	7、9	調査 消滅

## 2) 調査 (第3図 図版1)

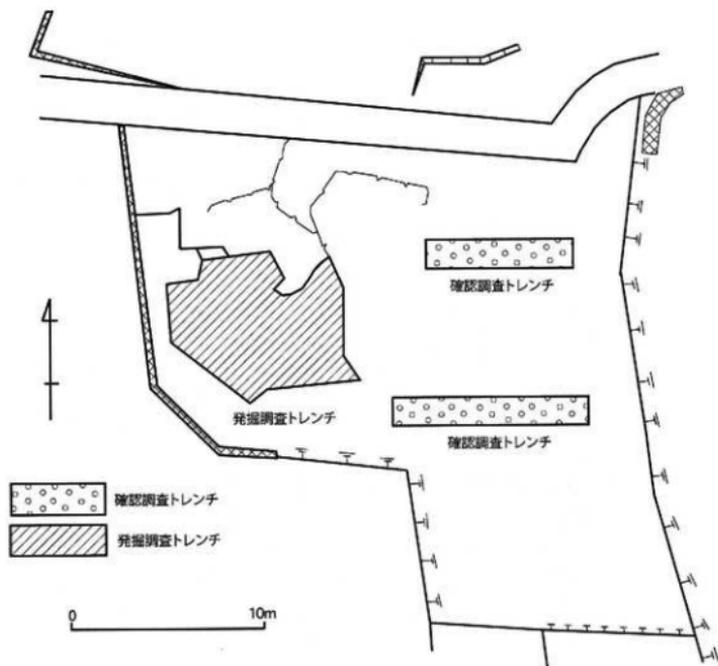
造成計画域は、南および西は旧宅地造成時の石垣、東は旧櫓田形成期の段、北には東西方向の道によって区画されていた。すでに建物はなかったが、門柱、石垣、石段、茶室の基礎などが残存し、竹を含み蔓のからむ雑木林状態で、廃棄物も散乱し、鬱蒼としていた。ただし、敷地西部にあって以前からその存在が知られていた19号墳の横穴式石室は、天井部の一部から開口し、内部は枯れ枝、枯れ草などがあつたもののほぼ空洞状態であった。

対象地域には、他の古墳などの存在も考えられ、雑木などのあい間をぬって、19号墳の墳丘状況確認のためのトレンチとその東側に2本のトレンチを設けて確認調査を先に実施した。

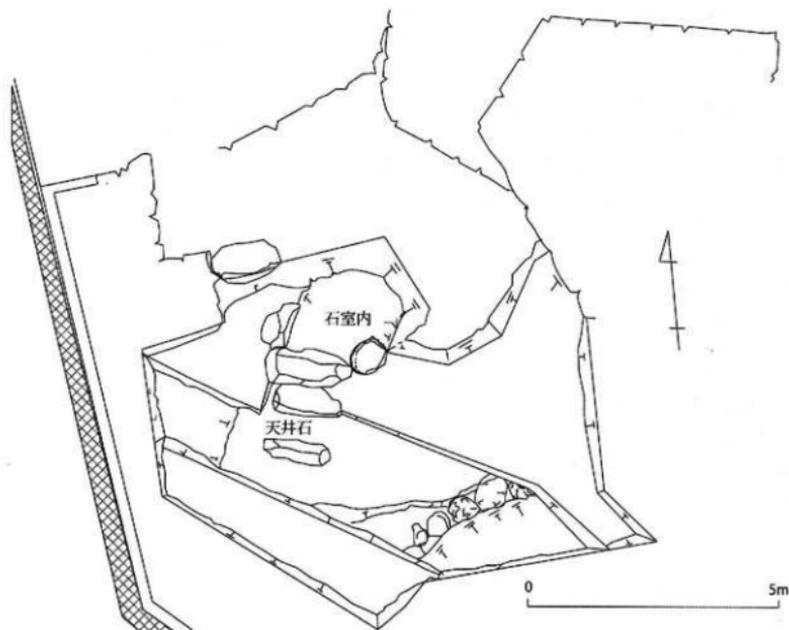
旧建物などの取り壊し、その廃材などの除去時およびその後の整地によって大半は攪乱され、東側の2トレンチは攪乱土とその下の地山などの自然堆積土を確認したのみであった。

発掘調査においては、石室状況と確認調査において十分に確かめることのできなかった墳丘の残存状態を知る必要があつた。そのため、古墳相当域と考えられる範囲の雑木・竹などの伐採、蔓などの切断を行ない、腐食土および廃棄物をともに除去し、これらを東南側に集積した。

この範囲は、旧建物の造成・建設などで、門付近、旧茶室基礎部以外はほぼ平坦になっていた。石室羨道部の天上石の一部は露出し、周辺には破壊された石室の石材が散乱していた。石材は門から旧建物玄関への石垣や石段などにも使用されていた。



第3図 調査トレンチ位置図 (1/250)



第4図 調査トレンチ図 (1/100)

### 3) 遺構

#### 19号墳

#### 墳丘状況 (第3図 図版1・2)

敷地の南・西には造成時に構築された石垣があり、北は家の門から玄関への石垣・石段、東北部には旧茶室の基壇が残存していたことから、当初、石室を中心に不整形の調査トレンチを設定して掘削した。造成に伴う盛土が厚く、調査トレンチのうち、石室にほぼ直行する幅1.5~2.5mのトレンチをさらに設けて墳丘状況の確認を行なった。

石室の羨道部の天井石上部が露出するまで攪乱されており、天井石に接して東西両側に傾斜する明黄褐色 (2.5Y6/6) 砂礫混じりシルト質土の古墳のマウンドを検出した。

古墳マウンド面は攪乱が激しく、検出面は不整で、凹凸状況であった。西側は現存する造成時の石垣があり、石垣構築に伴う埋土も厚く、残存する墳丘面の西への傾斜は少し確認したが、大半は攪乱され、墳丘の裾および古墳マウンド状態は十分に確認することはできなかった。

東側も造成に伴う埋土が深く、墳丘の裾部まで確認することはできなかった。ただ、マウンドの傾斜面で、幅約40cmほどの狭い雑段と、その上に3個の30~40cm幅の石と石の抜き取り跡を検出した。トレンチ幅が狭く、攪乱で破損もされており、雑段および石・石の抜き取り跡列の性格は不明であるが、やや弧状をなし、円墳と考えれば、墳丘面に設けられた築成段およびそれに伴う配石の可能性が考えられる。

また、トレンチ東端の埋土下部、墳丘面で散乱する須恵器大甕片群（5）を検出した。墳丘面には掘り込んで据えた跡は見られず、埋土内からの出土でもあって、明確な性格は不明である。

#### 石室状況（第4図 図版1・3・4）

横穴式石室は、玄室入口側の天井部から石室内に入れるようになっていて、枯れ枝・葉などが散乱していたが空洞状態で、底面は平坦に成らされていた。

石室の開口方向は南南西であるが、羨道入口側は南の柵畑との石垣によって遮断されているとともに、人頭大の詰め石などで塞がれ、本来の羨道入口を確認することはできず、羨道の長さも不明である。

玄室は、羨道側から西壁2石、東壁3石が残存するのみで、奥側は羨道部と同じく人頭大の石の詰め石によって塞がれ、中・奥壁状況は確認できなかった。ただ、現存する道、家への石段および門の状況から大半破壊されていると考えられる。

上述したように、石室底面はきれいに整地されていたが、本来の床面であるかを確認するため玄室最南端に先行トレンチを設定して掘削した。

①整地は近・現代以降に利用された時期のものであること、②本来床面中央付近に南北方向の溝状の窪みとその脇に人頭大の石があり、③玄室・羨道境の両壁床部の石が掘り込まれていることを確認した。

まず、現底面の新しい整地の埋土約5～10cm分を除去した。埋土内からは、須恵器の杯身（3）-羨道玄室側東壁付近-（4）、鉄製の刀子（1）-玄室の先行トレンチ部-、碧玉製の丸玉（2）とともに須恵器の杯身・蓋、高杯、はそう、甕、器台、土師器の小型丸底甕、短頸壺、高杯などの破片と、本古墳築造・埋葬時の遺物は出土したが、いずれも原位置を保っていないかった。また、この埋土内から瓦質土器、陶器、磁器（染付）の小片、パンセン条の鉄片が出土し、この整地が近・現代以降に行なわれたことがわかった（①）。

本来の床面には敷石は布設されてらず、棺台などの施設も確認できなかった。ただ、玄室から羨道にかけての床面中央に、両側部到人頭大の石が据えられた幅35～25cm、深さ5～10cmの溝が走っていた。羨道入口側など再利用時に破壊、破損しているところはあったが、溝内の埋土内からは須恵器杯の身・蓋の小・細片などが出土し、本石室築造時の排水溝と考えられる（②）。

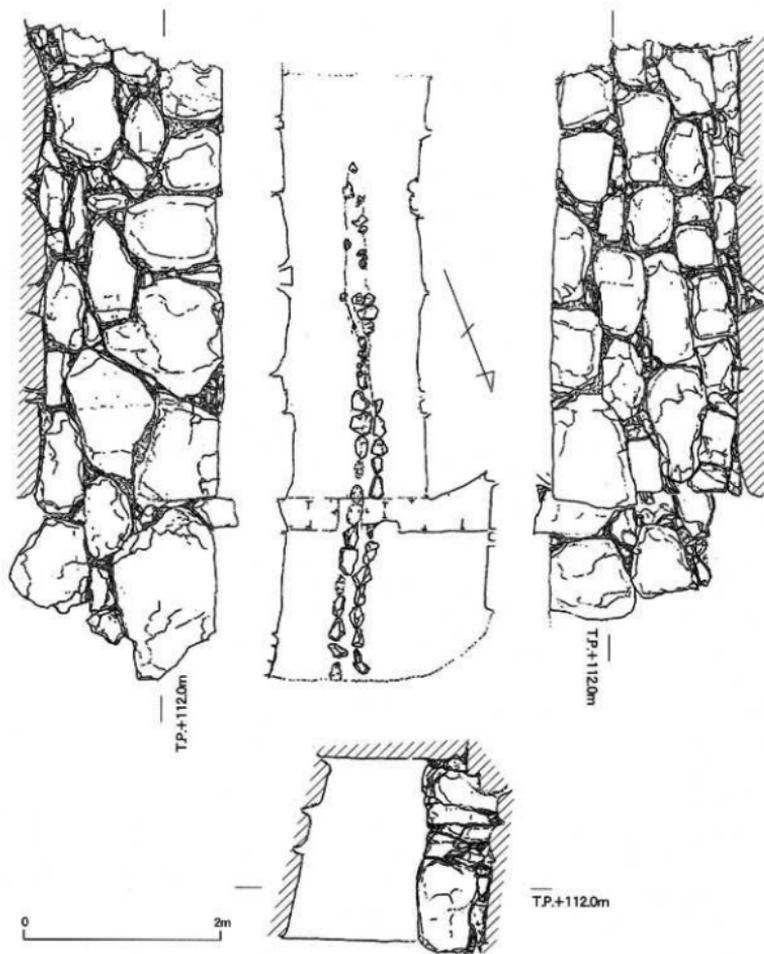
羨道の天井石3石は維持していたが、玄室の天井石は羨道境に石が残存していたが大きく移動され、現存するものは全くなかった。

羨道部側壁は左右とも最下石分5石が残存し、その上に2～3段を積み上げ、詰め石を入れて構築していた。左側壁は玄室側3石分までは大き目の石で、4石目以降（入口方向へ）はやや小さめの石によって構築されていた。また、右側壁もほぼ同じ傾向で、さらに2段目以上が入口方向に傾斜している。

玄室部側壁は、右壁が最下石1石と上2石分、左壁が最下石2石と上2・3石のみが残存していただけで、上部状況は不明である。

両側壁最下段の石は床面を掘り込んで据えられていたが、先行トレンチで確認した羨道・玄室境部の石は、とくに深く掘り込んで据えられていた。これは両側壁の構築状況を見てみると、石室構築時の目印で、羨道・玄室境石であるとともに、最初に据えられ、羨道は入口側へ、玄室は奥壁側へと順次構築していったものと考えられる（③）。

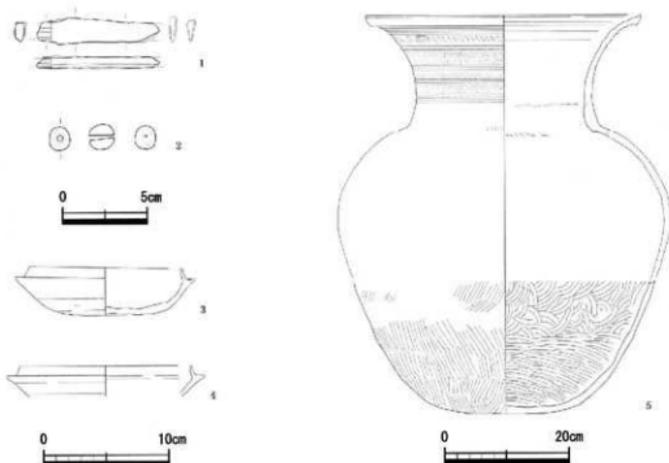
とくに右側壁は、羨道最端石を先に据え、その形状・石の側面が鋭角になっていた・に合わせて



第5図 19号墳石室図 (1/50)

玄室の石を掘えられた。そのため玄室の右袖部は鋭角に入り込んでいる。

石室は右片袖の横穴式石室で、残存する計測値は、羨道が長さ4.3m、幅1.5~1.35m、高さ1.7~1.8m、玄室長さ1.8~1.4m、幅2.05m (高さ不明) である。



第6図 出土遺物実測図

#### 4) 出土遺物 (第6図 図版5)

今回の調査では、以下の遺物が出土した。

1は、鉄製の刀子。表面は全面錆付着のため、詳細は不明。柄部と思われる箇所にも木質が残存する。残存の長さ7.4cm、幅1.7cm、厚さ1.0cmを測る。石室の羨道と玄室境の埋土内より出土。

2は、碧玉製の丸玉。両端2か所の穿孔の穴の大きさの違いから穿かれた方向が明瞭に見られる。表面に粗い削り痕が観察できるが、なだらかな面に仕上げられている。径1.4cm~1.2cm、高さ1.5cm、重さ4.13gを測る。色調は暗緑灰色。石室の埋土内より出土。

3・4は、須恵器の杯身。共に、わずかに内傾し短く立ち上がる口縁部に、水平の受け部をもつ。3は外面底部2/3に左廻りのヘラケズリを施す。色調は内面灰色、外面オリーブ灰色。口径12.1cmを測る。石室の羨道入口側の埋土内より出土。4は外面底部2/3にヘラケズリを施す。色調は内面灰白色、外面灰色。口径13.6cmを測る。石室内玄室の底面清掃時に埋土内より出土。

5は、須恵器の甕。口径が44.0cmと大型に属すと思われる。丸味をもつ平底から、直線的に外方にひらく体部。肩部は丸味をもち、屈曲して頸部につづく。なだらかに外方にひらく頸部から、さらに外弯する口縁部。口縁端部は上下に拡張し、外方に面をもつ。外面頸部には5条の凸帯の間に細かな櫛描波状文が施される。肩部から体部は欠損しているが図面上で復元した。外面体部から底部には明瞭な平行タタキと内面には同心円文タタキがみられる。色調は灰色。復元器高63.0cm。墳丘トレンチ東側より出土。

1~5の出土土器の時期は古墳時代後期に属する。

その他、石室内からは、須恵器の杯身・蓋、高杯、はそう、甕、器台、土師器の小型丸底壺、短頸壺、高杯など古墳時代後期、本古墳築造・埋葬時の遺物の小・細片とともに、瓦質土器、陶器、磁器(染付)の小片が出土した。また、調査トレンチ内からも古墳時代後期の須恵器(杯・高杯・大甕)と近世以降の陶器、磁器、瓦などの破片が出土した。

## 5) まとめ

今回の調査では、調査トレンチが限定されていたこともあり、19号墳の墳丘の形状・規模は明確にすることはできなかった。墳丘周縁近くで検出した極狭な甕壇および石列（抜き跡を含む）が本古墳に伴うもの＝外護列石施設であるのかも不明である。いずれにしても棚状の整地、建築工事に先立つ整地などによって、石室の破損のみならず墳丘の掘乱もかなりなされているように思われる。古墳の築造時期については出土遺物が僅少であるため明言できないが、石室の形状、出土須恵器から6世紀後半に求めることはできよう。

本古墳群31基のうち明確に築造・石室使用時期の判るものは少なく、発掘調査の行なわれた23・24号墳〈文献6〉および29・30・31号墳〈文献9〉はいずれも6世紀後半であり、出上している遺物などから4号墳、15号墳（経塚古墳）、16号墳（鉢伏古墳）も6世紀後半のものと思われ、大半は6世紀後半以降であろう。ただ、古墳・石室状況は不明であるが、28号墳が出土遺物から6世紀中葉にさかのぼり〈文献7・8〉、現段階において本古墳群内で初期段階に造られたものである。このことは、生駒西麓に存する本市内の古墳群でも、7世紀になってから築かれた墓尾古墳群を除くと築造開始時期の遅い1群といえる。

本古墳群は石室状況、馬具の副葬、組合式石棺の使用など、北接する山畑古墳群との共通性から1古墳群としてとらえることも言われている。ただ、この傾向は北の神並、みかん山、出雲井、客坊山など、南の五里山の各古墳群にも言えることである。各群内の古墳状況、地形＝立地・分布状況などを踏まえ、本質的な群分けは今後の課題といえよう。

ただ本古墳群は、北の花草谷、南の鳴川谷に挟まれた尾根、段丘、扇状地上に存し、立地・古墳分布状況からして1群としてとらえることは許容されよう。

いずれにしても本市における古墳、古墳群の課題は多く、今後、本古墳群をはじめ本市内の古墳・古墳群の調査および研究に期待したい。

### 〈追記〉

造成および家の新築工事によって破壊されることはなくなったが、現存する状態で残るとはいえ、墳丘・石室（内部は真砂による）ともほとんど埋没することになった。



第7図 第19号墳周辺の現状（工事中）

図版 1  
花草山古墳群第3次発掘調査  
遺構



1. 発掘調査前状況  
(北東より)



2. 調査前石室状況  
(羨道部より)



3. トレンチ完掘状況  
(北東より)



1. トレンチ完掘状況  
(西より)



2. 東西トレンチ  
墳丘残存・大壘片群出土状況  
(東より)

図版3 花草山古墳群第3次発掘調査 遺構



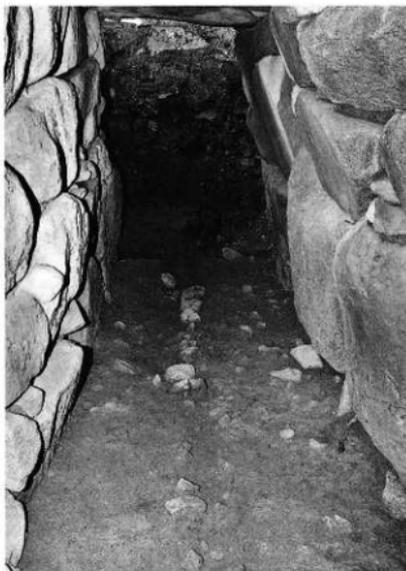
1. 石室内、  
刀子出土状況



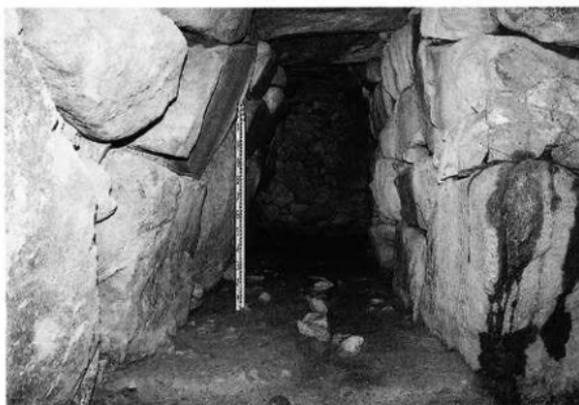
2. 石室内、  
須恵器杯身  
出土状況



3. 石室右袖壁状況  
(玄室側より)

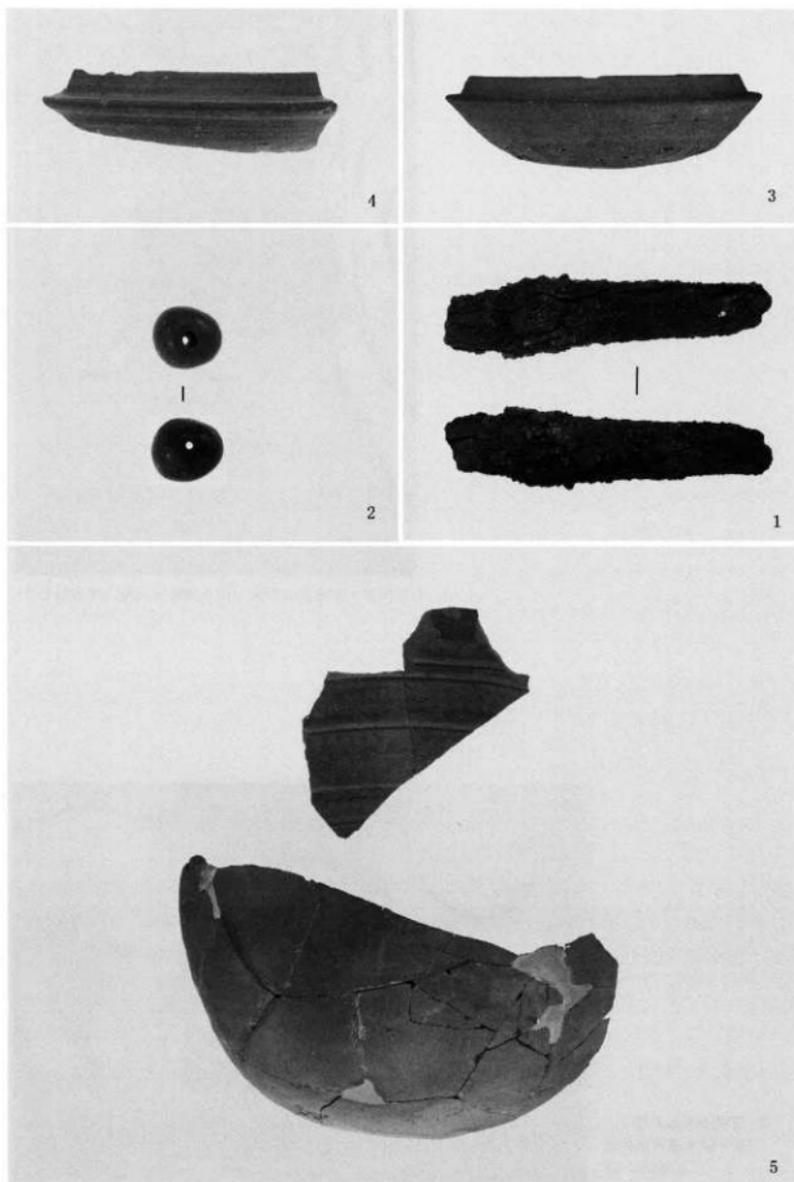


1. 石室羨道・玄室および床、排水溝検出状況（羨道側より）



2. 石室羨道および  
床・排水溝検出状況  
（玄室側より）

図版5 花草山古墳群第3次発掘調査 遺物



石室・墳丘トレンチ出土 須恵器 杯身、鉄製刀子、碧玉製丸玉

### 第3章 瓜生堂遺跡第57次発掘調査

#### 1) はじめに

瓜生堂遺跡は、東大阪市瓜生堂1～3丁目、若江西新町1・3丁目町に広がる弥生時代から江戸時代におたる複合遺跡である。とくに弥生時代の集落遺跡、方形周溝墓群の存在が周知されており、昭和40年の調査以来、56次の発掘調査を重ねている。さらにこれ以外に、近鉄奈良線高架・道路建設事業の発掘調査などが大阪府、財団法人大阪府文化財センターによって行なわれている。

本調査地周辺での近年の発掘調査は、上記の近鉄奈良線の高架と都市計画道路（大阪瓢箪山線）建設に伴うものがある<sup>9)</sup>。

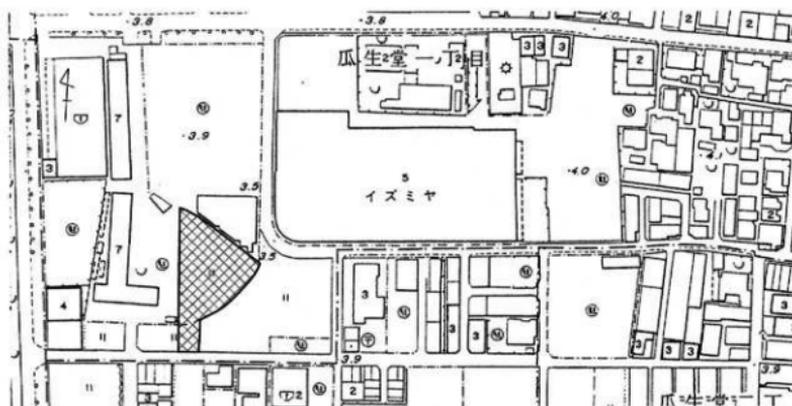
その結果、江戸時代の耕作跡、平安時代前半および平安時代後半から室町時代におたる集落跡（掘立柱建物、井戸、溝などと須恵器、土師器、瓦陶磁器質土器、陶磁器、木製品などの遺物）、寺院関連の遺物（瓦類など）、条里遺構、古墳時代後半の須恵器、土師器と円筒埴輪などの埴輪、古墳時代前期の土師器と遺構、そして弥生時代中期の方形周溝墓、溝などの遺構と多量の弥生土器、木製品が検出されている。

平成23年2月22日付けで、瓜生堂1丁目34番地外における宅地造成に伴う下水管理設工事計画に基づく調査依頼があり、3月1日に確認調査を実施し、中世・古代の遺物包含層（須恵器高杯・29-をはじめ須恵器・土師器片含む）および溝状遺構を検出した。この結果、届出（3月24日）による下水管理設工事が遺物包含層・検出遺構におよぶことから、発掘調査の必要が生じ、代理者を通して協議して調査範囲を確定した。届出者が個人であることから補助対象として発掘調査を行なった。調査は、9月17日から10月31日までの間実施した。

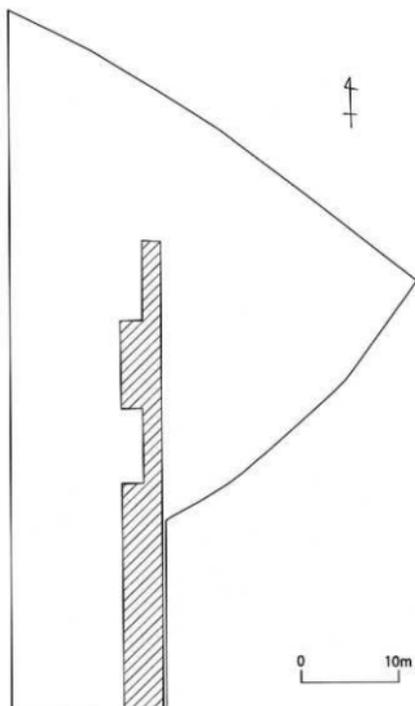
注)『都市計画道路大阪瓢箪山線建設に伴う瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』財団法人東大阪市文化財協会 1999年。『瓜生堂遺跡第46、47・1・2次発掘調査報告書』東大阪市教育委員会 2002年。その後、財団法人大阪府文化財センターにおいてひきつづき調査されている。



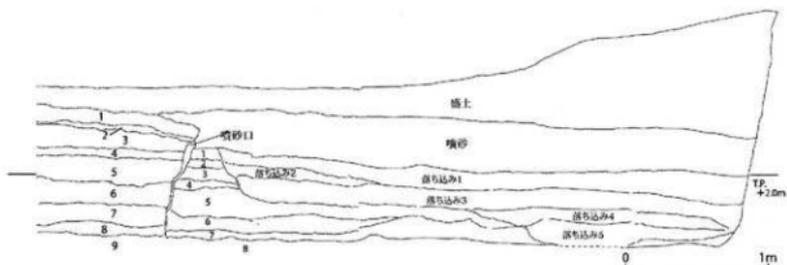
第1図 遺跡周辺図 (1/15000)



第2図 調査地位位置図 (1/2500)



第3図 調査トレンチ位置図



第4図 調査トレンチ東壁南端部断面図

2) 層位 (第4図 図版1)

盛土

落ち込み1 暗青灰色 (5B4/1) 砂混じりシルト質粘土

落ち込み2 青灰色 (10BG5/1) 砂混じりシルト質粘土

落ち込み3 オリーブ灰色 (5GY6/1)・青灰色 (5BG5/1) 砂混じり粘土質シルト

落ち込み4 暗青灰色 (5BG4/1) 砂混じりシルト質粘土

落ち込み5 暗青灰色 (10BG4/1) 砂混じり粘土

噴砂 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 粗～中粒砂

第1層 緑灰色 (10GY5/1) 砂混じりシルト質粘土、旧耕土。陶磁器小片出土。

第2層 灰褐色 (2.5Y6/4)・灰色 (10Y6/1) 砂混じりシルト質土、旧床土、土師器・陶磁器などの小・細片出土。

第3層 灰褐色 (7.5Y4/3)・灰色 (5GY6/1) 砂混じりシルト質土、須恵器・土師器・瓦器・陶磁器片など出土。

第4層 黄褐色 (2.5Y6/4) 砂混じり粘土質シルト、須恵器・土師器・瓦器・瓦・陶磁器片など出土、第1遺構面。

第5層 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト、須恵器・土師器・瓦器・瓦片など出土、第2遺構面。

第6層 オリーブ灰色 (5GY6/1) シルト・細粒砂、土師器小・細片出土。

第7層 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂混じりシルト質土、須恵器・土師器片など出土、第3遺構面。

第8層 灰色 (5GY5/1) シルト質粘土とシルトの互層

第9層 灰オリーブ色 (5Y6/2) 粗～中粒砂



第5図 東壁断面・第4層上面噴砂・断層筋 (西より)

### 3) 遺構

確認調査の結果に基づき、現代の耕土および盛土、旧耕土（第1層）、床上（第2・3層）とそれに伴う整地土（第4・5層）を、機械掘削と人力掘削で除去した。

そのおり、調査地南部において第1層上面からの砂層および落ち込みを検出した。落ち込みは砂混じりのシルト質粘土と粘土層（落ち込み1～5層）で、第1層から掘り込まれた近代以降の溜池と考えられ、陶磁器片などとともに、形成時の掘削で整地土内などから掘り出された須恵器・杯身（26）・大甕（38）なども包含していた。

第1層での地震は、ほぼ西北西-東南東方向に走る断層（約25～30cmのズレ）とともに、その北横に噴砂をも引き起こしていた（第4・5図）。第1層からは、土師器・須恵器・瓦質土器・陶器などとともに磁器（染付）が出土し、落ち込み上面を噴砂が覆っており、地震は昭和21年（1946）の南海道地震の痕跡と考えられる。

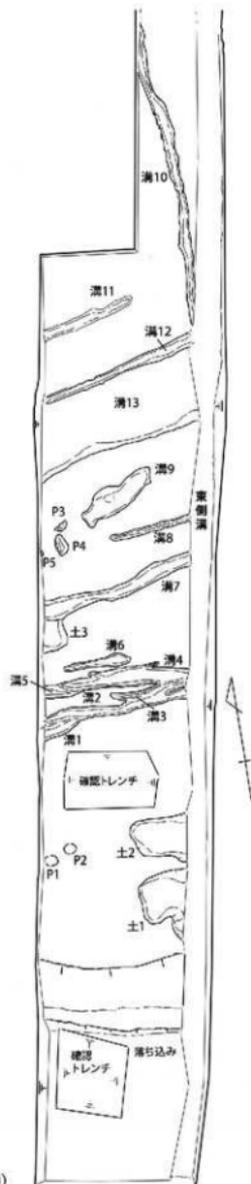
#### —第1遺構面—（第4図 図版1）

第1遺構は、調査地中・南部の第4層上面で検出した。第4層は黄褐色砂混じり粘土質シルトの整地土で、須恵器（杯・壺・高杯・甕）、土師器（壺・甕・把手付釜・皿）、瓦器（椀・皿）、瓦質土器（摺鉢・44）、平瓦、陶磁器などの破片が出土した。

遺構は、溝13条、土坑3基（土1～3）、ピット5個（P1～5）を検出した。

溝は、南北方向の溝1条（溝10）と東西方向の溝12条（溝1～9、11～13）で、溝9・12・13以外は幅10～40cm、深さ10～5cm。溝10の埋土は、緑灰色（7.5GY6/1）砂混じりシルト、溝1～8の埋土はオリーブ灰色（2.5GY6/1）砂混じりシルト質土で、耕作に伴う筋溝と考えられる。埋土内からは須恵器、土師器、瓦器（椀・皿）、瓦の小・細片などが出土した。溝9は長さ190cm、幅60～30cm、深さ7cmを測り、埋土は灰色（10Y5/1）砂混じりシルト質土で、土師器・瓦器の小・細片が出土した。溝13は幅2m、深さ16cmを測り、埋土は灰色（10Y5/1）砂混じりシルト質土で、須恵器片（壺・34・杯・大甕）、土師器片（壺・皿・杯・羽釜）、平瓦各片と上層で元豊通宝（47）が出土した。溝13の北壁に沿った底面に幅14cm、深さ13cm、埋土がオリーブ灰色（2.5GY6/1）砂混じりシルト質土の溝12があった。

P1～5の5個のピットは、径10～40cm、深さ5～17cmを測る小さいもの。埋土はオリーブ灰色（2.5GY6/1）砂混じりシルト質土で、土師器・瓦器の小・細片が出土した。



第6図 第1遺構面 (1/100)

土坑1・2は南部の東側に検出し、調査トレンチ東外に広がり、形状などは不明。断面は浅い逆台形を呈し、深さ13~19cmを測る。埋土は黄灰色2.5Y5/1砂礫混じりシルト質土で、土坑1からは須恵器(杯身・壺・大甕)、土師器(壺・杯・高杯・皿・甕)、土坑2からは土師器(壺・杯・高杯・皿)の各破片が出土した。

土坑3は調査トレンチ西外に延び、さらに溝7によって切断されていたため、形状などは不明。埋土は暗灰黄色粘土質シルトで、須恵器・土師器などの小・細片が出土した。

第1遺構は、遺構内および第4層の出土遺物などから、室町時代後半から江戸時代前半のものと考えられる。

—第2遺構面— (第7図 第2表 図版2)

第2遺構は、調査地中・南部の第5層上面で検出した。

第5層は、第7層(第3遺構)を覆った第6層(オリーブ灰色シルト・細粒砂=自然堆積層上、須恵器・土師器の小・細片が少量出土)の整地土=暗灰黄色粘土質シルトで、須恵器(杯蓋・32・杯身・壺・高杯・大甕・39-)、土師器(椀・高杯・羽釜・甕・皿)、瓦器(椀・皿)、磁器(白磁碗、青磁碗・龍泉窯-)、瓦質土器、平瓦などの破片が出土した。

遺構は、溝6条(溝14~19)、土坑2基(土4・5)、ピット13個(P6~18)を検出した。詳細な計測値、埋土、出土遺物の詳細は第2表参照。

溝14は、西側が調査地外および落ち込みによって切断されていた。埋土内には焼土粒を含んでいた。

溝15は、北西-南東方向に延び、埋土はにぶい黄褐色砂礫混じりシルト質土で、須恵器の甕および土師器の破片が出土した。

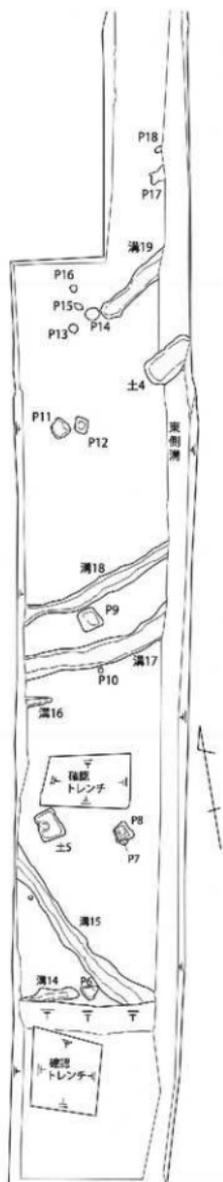
溝16・17・18は、ほぼ平行して東西方向に延びる。埋土は黄褐色砂礫混じりシルト質土で、須恵器の杯、大甕、はそう、壺、土師器の甕・皿・高杯などの破片が出土した。

溝19もほぼ東西方向に延び、埋土も黄褐色砂礫混じりシルト質土で、須恵器の杯身、高杯、甕、土師器の椀、壺、甕、皿、瓦器椀と瓦の破片が出土した。

土坑4は、東側は調査地外。平面長方形を呈し、断面はゆるやかな逆台形状をなす。埋土は黄褐色砂混じり粘土質シルト、緑灰色砂混じりシルト質粘土、暗青灰色砂混じり粘土の3層に分かれ、底は砂層(第9層)に達して湧水をもたらした。遺物は須恵器の杯、土師器の壺などの破片が出土した。

土坑5は平面隅丸の長方形を呈し、西側底面に円形ピットを有していた。埋土内から遺物は検出されず、明確な時期・性格は不明。

第7図 第2遺構面 (1/100)



第2表 第2遺構(第5層上面)遺構表

遺構	規模cm	土色・質	遺物	備考
P6	37×34 深8	灰色10YR6/6粘土質シルト、暗黄褐色10YR6/6シルト質粘土塊・粒含む	土師器片	
P7	14×10 深14	にぶい黄褐色10YR6/4砂礫混じりシルト質土		
P8	42×40 深20	にぶい黄褐色10YR6/4砂礫混じりシルト質土		
P9	49×45 深25	にぶい黄褐色10YR5/4砂礫混じりシルト質土 暗灰黄色2.5Y5/2砂礫混じりシルト質土	土師器(帯・鉢・羽釜・皿)、須恵器(人甕・壺)	
P10	14×12 深5	オリブ灰色2.5GY6/1砂混じりシルト質土、炭片少し含む	須恵器(大甕)、土師器(羽釜・皿)	
P11	47×40 深7	緑灰色7.5GY5/1砂混じりシルト質土、にぶい褐色7.5YR5/4シルト含む	須恵器(大甕)、土師器(壺・皿)	
P12	37×26 深3	暗灰黄色2.5Y5/2砂礫混じりシルト質粘土	須恵器(杯)	
P13	18×16 深4	オリブ灰色5GY5/1砂混じりシルト質土		
P14	31×30 深7	オリブ灰色5GY5/1砂混じりシルト質土	土師器片	
P15	25×14 深6	オリブ灰色5GY5/1砂混じりシルト質土	土師器(甕)	
P16	14×16 深4	オリブ灰色5GY5/1砂混じりシルト質土	土師器(高杯)	
P17	45×25 深8	暗灰黄色2.5Y5/2砂礫混じりシルト質土		
P18	19×12 深3	暗灰黄色2.5Y5/2砂礫混じりシルト質土		
土4	130×65 深55	黄褐色2.5Y6/4砂混じり粘土質シルト 緑灰色10G5/1砂混じりシルト質粘土 暗青灰色10BG4/1砂混じり粘土	須恵器(杯)、土師器(壺)	
土5	68×50 深17 径25、深7ビット	黄褐色2.5Y6/4砂混じり粘土シルト		
溝14	幅26~35 深7	灰色10YR6/6粘土質シルト、暗黄褐色10YR6/6シルト質粘土塊・粒含む		
溝15	幅30~60 深12	にぶい黄褐色10YR6/4砂礫混じりシルト質土	須恵器(甕)、土師器片	
溝16	幅44~23 深10	黄褐色2.5Y6/4砂混じり粘土質シルト	須恵器片、土師器片	
溝17	幅57~47 深8	黄褐色2.5Y6/4砂混じり粘土質シルト	須恵器(杯・甕・はそう)、土師器(甕・皿・高杯)	
溝18	幅25~10 深8	黄褐色2.5Y6/4砂混じり粘土質シルト	須恵器(甕・杯)、土師器(甕・皿)	
溝19	幅45~35 深15	黄褐色2.5Y6/4砂混じり粘土質シルト	須恵器(杯身・高杯・甕)、瓦器(椀)、土師器(椀、壺・甕、皿)、瓦	

ビット13個のうち、P7・10・13・15・16・18は、径は小さく深度も浅く、P10・15・16から少量の遺物は出土したのみで、性格は不明。

P8・9・11はいずれも不整ではあるが平面隅丸の方形を呈していた。約1mとほぼ等間隔で南北方向に並び、何らかの施設(建物など)に伴うものと考えられる。

P11東部で検出したP12もやや小型の平面隅丸の方形を呈しているが、性格は不明。

P6は、溝14の東先端、溝15との間で検出した面隅丸の三角形を呈するもので、埋土内には溝14同様焼土粒を含んでいた。

第2遺構は、遺構内および第5層の出土遺物などから、平安時代後半から鎌倉時代のもと考えられる。

—第3遺構面— (第8・9図 第3表 図版3～5)

第3遺構は、調査地中・南部の第7・8層上面で検出した。

第7層は、にぶい黄色砂混じりシルト質土の整地土で、須恵器(杯身・33・高杯・壺・甕・35・器台・30・はそう・36・皿・41・脚部・37-)、土師器(杯・42・甕・壺・高杯)、平瓦などの破片が出土した。第8層は灰色シルト質粘土とシルトの互層の自然堆積層である。

遺構は、溝1条(溝A)、土坑9基(土I～IX)、ピット7個(Pa～g)を検出した。詳細な計測値、埋土、出土遺物の詳細は第3表参照。

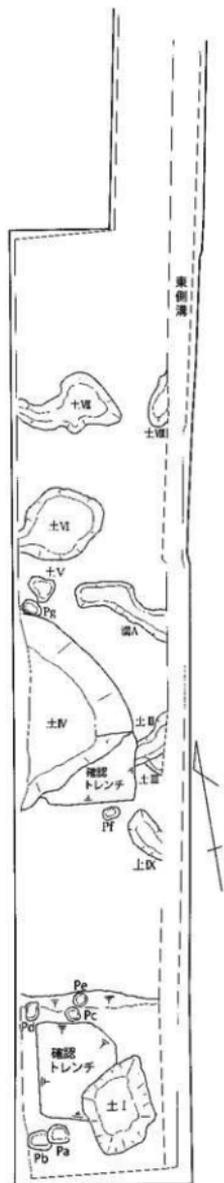
溝Aはトレンチ中央付近から東南東方向に延び、調査地外へつづく不整形のもので、埋土内から少量の炭片を検出したが、用途は不明。

土坑Iは、近代以降の落ち込み内で検出した平面がやや矩形の長方形をなし、1.96m×1.3m、深0.77mと大型の土坑で、底部は砂層に達し、湧水が激しかった。土坑内は9層に分層され、下部3層は砂混じりの青灰色系統のシルト質粘土・粘土層と、堆積土で浸水状態であったことが知れる。堆積土内からは須恵器(杯・甕)、土師器(甕・壺)などともに縄目を有する平瓦片が出土した。上層の6層はいずれも焼土および炭を含み、とくに6層には多く、5層は大半が焼土であった。上層内からは須恵器(杯身・杯蓋・壺・甕)、土師器(壺・甕・高杯・把手付釜)などの破片が出土した。

土坑IIは、確認トレンチ東壁で検出した遺構で(溝状遺構としたもの)、西はこの確認トレンチで切断され、東部は調査トレンチ外へ延びる。検出面では平面b字状を呈し、埋土内には部分的に多くの灰が混ざり、須恵器(杯・26・27-)、壺、甕)などが出土した。

土坑IIIは、北側を土坑IIによって切断されているとともに、東は調査トレンチ外へ広がり、形状は全く不明である。土坑内、とくに東側には多量の炭が見られ須恵器(杯蓋・25-)などを検出した。また、土坑IIおよびIIIの上部のくぼみ箇所・灰黄色2.5Y6/2砂礫混じり粘土質シルト-からは土師器高杯・40-、須恵器杯蓋・31-などが出土した。

土坑VIは、西側が調査地外に広がる、4m×3.3m、深さ0.73mの大型の土坑である。壁面はやや丸みもちゆるい段をしながら内側へ傾斜し、底面はほぼ平であった。土坑内は5層に分層され、下部2層は砂混じりの青灰色シルト質粘土・粘土層と、堆積土で浸水状態であったことが知れる。堆積土内からは須恵器(杯・甕)、土師器片とともに縄目を有する平瓦片が出土した。上層の3層はいずれも焼土および炭を含み、とくに3層は大半が焼土であった。上層



第8図 第3遺構面 (1/100)

第3表 第3遺構(第7・8層上面)遺構表

遺構	規模cm	土色・質	遺物	備考
Pa	48×41 深11.5	オリーブ灰色2.5GY5/1・砂・シルト混じり粘土質シルト、炭含む	土師器(壺・甕)、須恵器小片	
Pb	50×42 深21.0	灰色7.5Y4/1砂礫混じり粘土質シルト		
Pc	25×22 深12.1	灰黄褐色10YR5/4砂混じり粘土質シルト 明黄褐色5Y5/6砂・シルト粒含む		
Pd	39×37 深9.0	灰色5Y6/1砂礫混じりシルト質粘土		
Pe	28×27 深19.2	明黄褐色2.5Y6/6・黄灰色2.5Y6/1砂礫混じりシルト質粘土		
Pf	42×25 深11.9	黄灰色2.5Y4/1砂混じり粘土質シルト、浅黄色2.5Y7/6シルト粒含む		
Pg	46×30 深14.1	オリーブ黒色5Y3/1砂混じり粘土質シルト、焼土粒、炭含む	土師器(甕)	
上I	196×130 深77	第9図	須恵器(杯身・杯蓋・壺・甕)、土師器(壺・甕・高杯・把手付釜)、平瓦	焼土粒・塊包含層あり
土II	82×70 深8.0	灰黄色2.5Y6/2砂礫混じり粘土質シルト 暗灰黄色2.5Y5/2砂礫混じりシルト質粘土、焼土、炭、炭含む	須恵器(杯蓋・壺・甕)	
土III	40×30 深11.5	灰黄色2.5Y6/2砂礫混じり粘土質シルト 黒色2.5GY2/1炭混じりシルト質粘土、焼土含む	須恵器(杯蓋)・土師器(壺・高杯)、焼土塊、炭	
土IV	400×330 深73	第9図	須恵器(杯蓋・杯身・壺・大甕)、土師器(杯・壺・甕・椀・把手付釜)、移動式甕、平瓦	焼土粒・塊包含層あり
土V	62×50 深8~15	オリーブ黒色5Y3/1砂混じり粘土質シルト、焼土粒、炭含む		
土VI	210×150 深18.9	灰色5Y6/1砂混じり粘土質シルト 褐灰色10YR4/1シルト・砂粒多く含む		
土VII	284×142 深4	褐灰色7.5YR4/2・灰色5Y5/1砂混じり粘土質シルト、炭多く含む		
土VIII	80×48 深2.7	灰色5Y6/1砂混じり粘土質シルト		
上IX	116×64 深4.2	褐灰色7.5YR4/2・灰色5Y5/1砂混じり粘土質シルト、炭多く含む		
溝A	幅64 深7	褐灰色7.5YR4/1・灰色5Y5/1砂混じり粘土質シルト、炭多く含む		

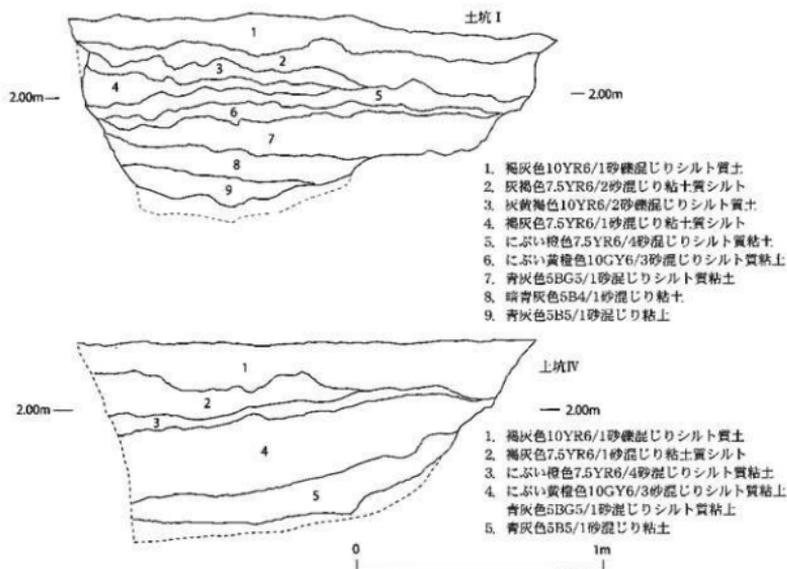
内からは須恵器(杯蓋・24・甕)、土師器(壺・甕・椀・把手付釜・甕)などの破片が出土した。

土坑Vは、平面隅丸の三角形を呈し、底面は凹凸していた。埋土は炭片を含むオリーブ黒色砂混じり粘土質シルトであったが、遺物は出土していない。

土坑VIは、西端が調査地外に延びる。検出面では平面変形のうちわ形、断面は逆台形状を呈する。土坑内は灰色砂混じり粘土質シルトと砂粒多く含む褐灰色シルトの2層に分かれたが、遺物は出土していない。

土坑VIIは、西端が調査地外に延びる。検出面では平面変形のP字状、断面は逆台形状を呈する。埋土は褐灰色・灰色砂混じり粘土質シルトと焼土粒が混じり炭をやや多く含んでいたが、遺物は出土していない。

土坑VIIIは、東端が調査地外に延びる。検出面では平面隅丸状、断面は逆台形状を呈する。埋土は灰色砂混じり粘土質シルトで、遺物は出土しなかった。



第9図 土坑 I・IV断面図

土坑IXは、東端が調査地外に延び、検出面で半面変形の隅丸長方形、断面は逆台形状を呈する。

P aは、埋土が炭の混じるオリーブ灰色2.5GY5/1・砂・シルト混じり粘土質シルトで、土師器の壺・甕の各片と須恵器小片が出土した。

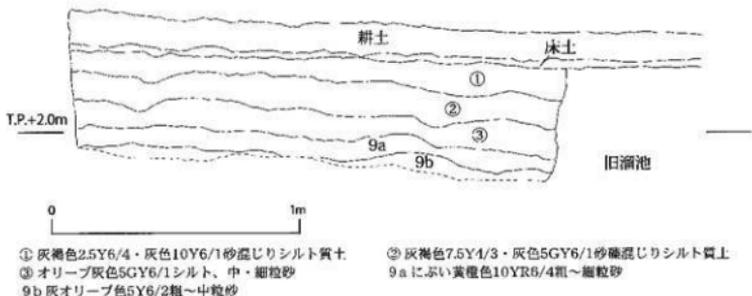
P bは、P aによって東部が切断されている。遺物は出土していない。

P cは埋土が明黄褐色・シルト粒の混じる灰黄褐色砂混じり粘土質シルト、P dは埋土が灰色砂礫混じりシルト質粘土、P eは埋土が明黄褐色と黄灰色の砂礫混じりシルト質粘土、P fは埋土が浅黄色シルト粒を含む黄灰色砂混じり粘土質シルトで、いずれからも遺物は出土しなかった。

P gは、埋土が焼上粒・炭の混じるオリーブ黒色砂混じり粘土質シルトで、土師器(皿・43-)などが出土した。

第3遺構は、遺構内および第7層の出土遺物などから、古墳時代から奈良時代にわたるものと考えられる。

調査トレンチのほぼ中央、北から20m付近を境にして、中部のなかほど(北端から20m付近)で大きく様相を異にしていた。北部は、現代の耕土、盛土および現代の耕土、床土および遺物包含層(第①・②層)は共通するものの、中部南と南部で検出した上述の奈良時代から室町時代の遺構(第1～3遺構)およびそれぞれに伴った整地層はなく、粗～細粒砂堆積層(第9層)が広がり、その上面で古墳時代初頭から後期前半の遺構・遺物が見られた。また、北部域には現代の耕土・床土直下(江戸時代末以降)に造作されていた大きな、幅9.6m以上、深さ1.5m以上の溜池があった-湧水が激しく底を確認することはできなかった-(第10・12図参照)。



第10図 調査トレンチ東壁北端部断面図

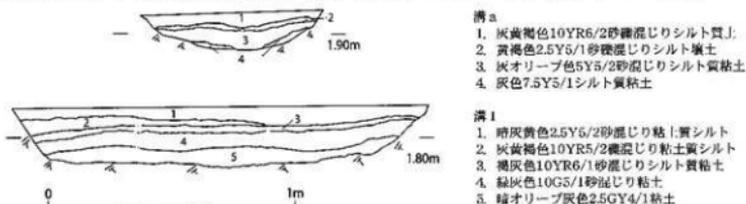
一第4造構面一 (第10～13図 図版6・7)

トレンチ北部の第9 a・b層上面において、3条の溝(溝a、溝I、溝II)を検出した。

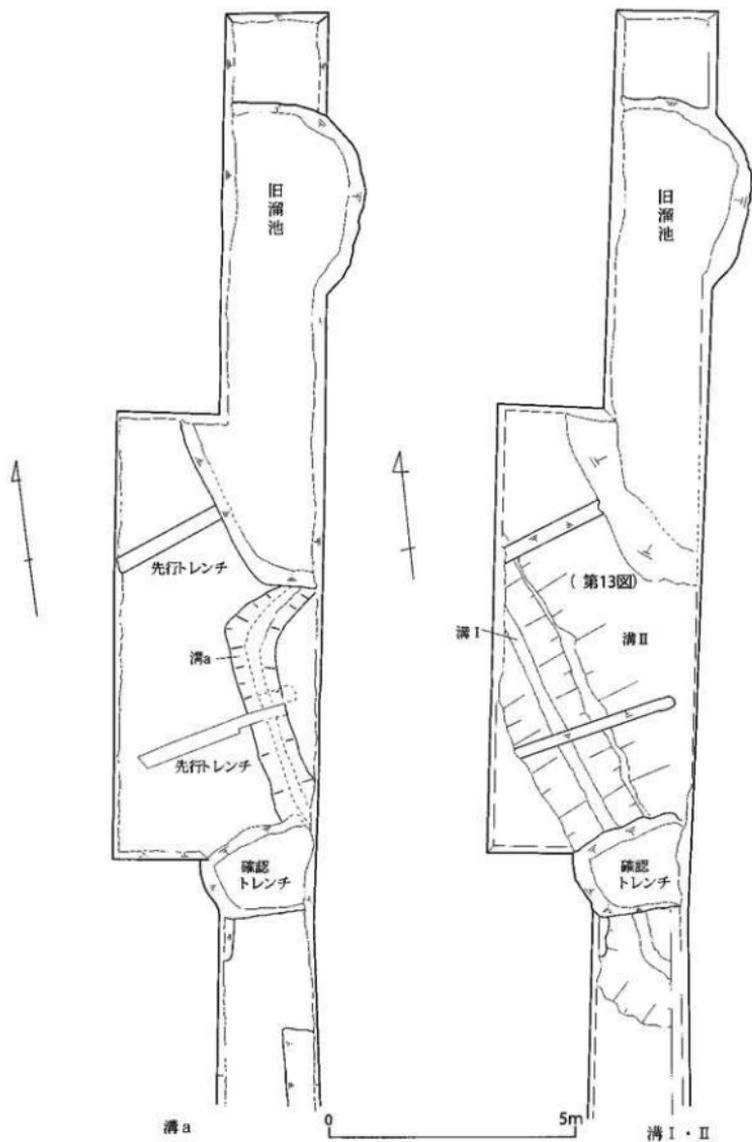
トレンチの中・北部は、確認調査において現代の耕土・床土および少量の須恵器・土師器の小・細片を検出した遺物包含層(①灰褐色・灰色砂混じりシルト質土・②灰褐色・灰色砂礫混じりシルト質土・南部の第2・3層相当)と湧水をもたらした砂層(9 aにぶい黄橙色粗～細粒砂・b灰オリーブ色粗～中粒砂)のみを検出したことから、当初2m幅で調査を開始したが、砂層上面で古式土師器および溝の存在を確認したことから北部の9m分を2m幅拡張した。

溝aは、トレンチ東側において溝IIを掘り込んで形成されていた。南南東から北北西方向に4m、北で北東方向へ曲がり1.5m、南端は調査地東へ、北端は溜池によって切断され、検出形は平面「へ」の字状を呈していた。幅60～70m、深さ14～18mを測る。断面はやや浅いすり鉢状を呈し、埋土2層(第1層-灰黄褐色砂礫混じりシルト質土・第2層-黄褐色砂礫混じりシルト壤土)、堆積土2層(第3層-灰オリーブ色砂混じりシルト質粘土・第4層-灰色シルト質粘土)の4層に分層された(第11図)。これらの層からは、甕、壺などの古式土師器片とともに須恵器片(杯・甕)が出土した。古墳時代後期前半。

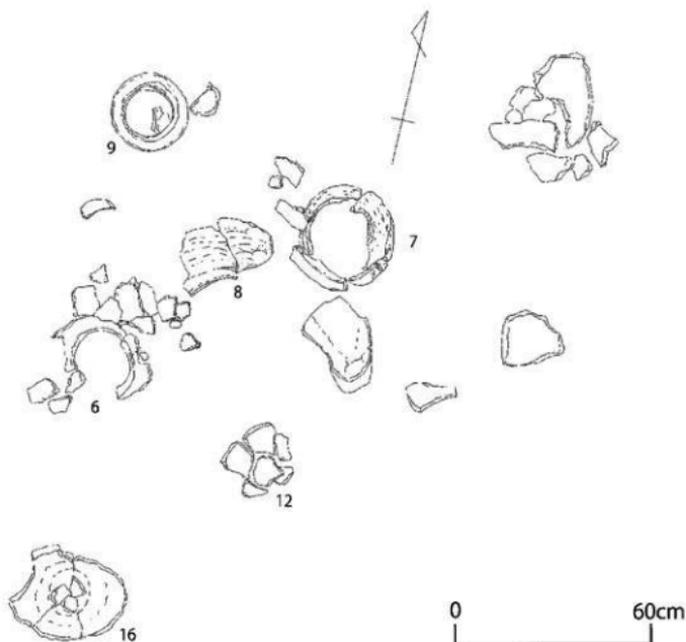
溝Iは、溝aの西、第9 b層上面で検出した。北北西から南南東方向に延び、南端で東に折れていた。検出長約7m、幅1.5～1.7m、深さ24～30mを測る。断面は平たい逆台形状を呈し、埋土2層(第1層-暗灰黄色砂混じり粘土質シルト・第2層-灰黄褐色礫混じり粘土質シルト)、堆積土3層(第3層-褐灰色砂混じりシルト質粘土・第4層-緑灰色砂混じり粘土・第5層-暗オリーブ灰色粘土)の5層に分層された(第11図)。埋土層・堆積土層間は場所によって深淺さが異なり、おおむね南部方向に向けて堆積土層は薄くなり、埋土の割合が多くなっていた。溝内(とくに埋土内)からは



第11図 溝a・溝I断面図



第12図 溝aおよび溝I・II平面図 - 第9a層および9b層上面遺構面 -



第13図 溝Ⅱ上層遺物出土状況平面図

多くの土師器（二重口緑壺・1-、壺・4・5・14、小型壺・19-、甕・10・11・13・15-、小型鉢・18-など）が出土した。遺物はいずれも破損し、完形品は全くなかった。

溝Ⅱは、溝Ⅰに平行するようにその東で西屑などを検出した。北北西から南南東方向に延び、北は溜池によって切断されているとともに、大半は上述した溝aによって破壊され、東屑の状況は不明である（溝幅不明）。検出長9m、深さ10～15mを測る。溝内は浅い摺鉢状を呈し、埋土・黄褐色(2.5Y5/1)砂混じり粘土質シルトと堆積した灰オリーブ色(5Y6/2)中・細粒砂の2層であった。埋土・堆積砂の大半は溝Ⅰ・溝a間に残存し、その中から多くの土師器（二重口緑壺・2-、壺・3-、小型丸底壺・22・23、鉢・20-、高杯・16-、甕・6・7・8・9・12-など）が出土した（第13図）。

溝Ⅱの西屑は溝Ⅰの東屑とほぼ共有するように接し、その境が不明瞭な所もあった。この境から土師器の高杯・17-、小型丸底壺・21-などが出土した。

溝Ⅰ・Ⅱの検出層である第9層以下は極めて厚い砂層で、確認トレンチ、溜池掘削でも湧水が激しく（機械掘削時には壁が崩落を繰り返した。）、調査終了後の貯留施設埋設工事においても（工事に伴い矢板を打設）、2.5m以下でも砂層であった。溝Ⅱ底下の9層内上部から石鏝(46)打製石器(45)などが出土した。

4) 出土遺物 (第14・15図 図版8～13)

1・2は二重口縁壺。1は内外面共に風化の為調整不明。口径19.6cm。溝Ⅰ出土。2は外面口縁部に篋歯文がみられる。内面は風化の為調整不明。山陽系。口径20.0cm。溝Ⅱ出土。

3～5は土師器壺。3はなだらかに大きく外反する口縁部から、端部は外方に面をもつ。内面に粘土織目痕がみられる以外は、風化の為調整不明。口径13.8cm。溝Ⅱ出土。4はなだらかに外反する口縁部から、端部は上方につまみ上げる。外面端面には櫛状工具による刻目が施される。口径17.8cm。溝Ⅰ出土。5は口頸部欠損。ほぼ球形の体部をもち、底部はやや尖り気味。器高20.6cm。溝Ⅰ出土。

6～13・15は土師器甕。6・8は「く」の字形に外折する口縁部から、端部は上方につまみあげる。7・9・10・12は「く」の字形に外折口縁部から、端部は外方に面をもつ。7は細かな平行タキに少しのハケメがほどこされ、体部下には円形に穿った窓がみられる。11・13はなだらかに外反する口縁部から、端部は丸味をもつ。15は底部。大型の甕と思われる。溝Ⅰ出土。

6は外面に細かなタキ、内面にはヘラケズリが見られる。口径18.0cm。溝Ⅱ出土。7は体部に穿孔をもつ庄内式甕。調整は外面上半部に平行タキ、下半部には斜め方向のタキ日後、わずかだが、ハケメがみられる。内面は丁寧なヘラケズリが施されている。口径16.6cm。溝Ⅱ出土。8は、外面に密な平行タキ、内面にはヘラケズリが施される。口径16.0cm。溝Ⅱ出土。9は外面細かな平行タキ、内面にはヘラケズリが施される。口径15.7cm。溝Ⅱ出土。10は外面にタキのちハケメが施されている。口径14.6cm。溝Ⅰ出土。11は外面平行タキが施される。口径14.6cm。溝Ⅰ出土。12は外面平行タキが施される。13は外面ハケメ後、平行タキが施され、内面には横方向のヘラケズリが見られる。口径14.0cm。溝Ⅰ出土。

14は土師器壺の底部。内外面共に風化の為調整不明。色調は内面褐灰色、外面灰白色。溝Ⅰ出土。

16・17は高杯。16は杯部。直線的に外方に開く口縁部から、端部はやや尖り気味に終わる。口径22.4cm。溝Ⅱ出土。17は直線的に「ハ」の字形に広がる裾部から、端部は丸味をもつ。内面には細かなハケメが施され、円形の透かし窓を穿つ。裾部径16.6cm。溝Ⅰ出土。

18は鉢。外方に緒線的に広がる直口の口縁部をもつ。底部に焼成前の穿孔を施す。内外面共に風化の為調整不明。口径17.5cm。溝Ⅰ出土。

19は小型壺。一部に黒斑が見られる。内外面共に風化の為調整不明。口径7.7cm。溝Ⅰ出土。

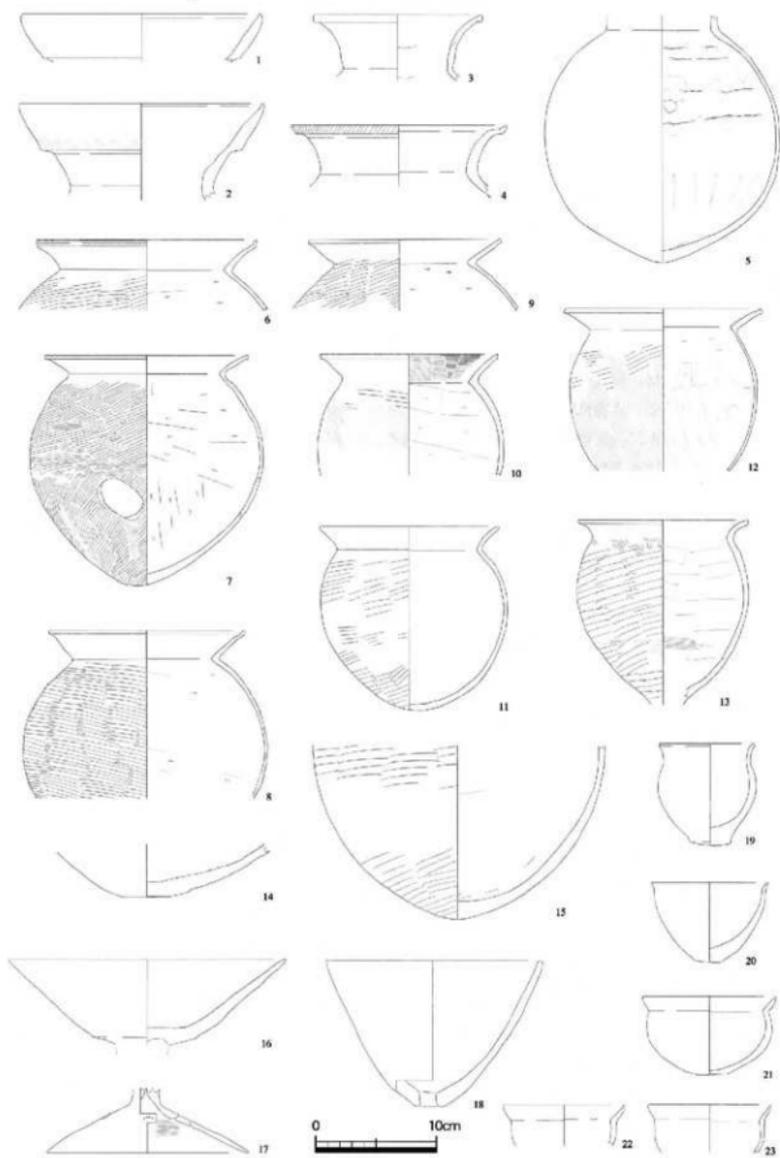
20は小型鉢。丸味をもちながら立ち上がる口縁部から、端部はわずかに外弯する。内外面共に風化の為調整不明。口径9.6cm。溝Ⅰ出土。

21～23は小型丸底壺。丸味をもつ体部から、口縁部は外折する。共に風化の為調整不明。21は口径11.0cm。溝Ⅰ・溝Ⅱ出土。22は口径10.0cm。溝Ⅱ中央出土。23は口径10.2cm。溝Ⅱ中央出土。

1～23出土土器の時期は庄内期に属す。

24～27は須恵器杯蓋。古墳時代後期前半に属す。24・26はやや扁平な天井部から、にぶい稜をもつ。口縁端部は段をもつ。25・27は丸味をもつ天井部から、尖り気味の稜をもつ。口縁端部は下方に面をもつ。24は天井部2/3にヘラケズリが施される。口径14.3cm。土Ⅳ出土。25は天井部1/2にヘラケズリが施される。口径12.4cm。土Ⅲ出土。26は外面天井部2/3にヘラケズリ、内面天井部にはナデが施される。口径13.9cm。土Ⅱ内出土。27は外面天井部3/4にヘラケズリ、内面天井部にはナデが施される。口径12.9cm。ほぼ完形。土Ⅱ出土。

28は須恵器杯身。丸味をもつ底部から、水平な受部、口縁端部は内傾する面をもつ。外面底部2/3にヘラケズリが施される。口径9.8cm。落ち込み出土。古墳時代後期前半に属す。



第14图 出土文物实测图 1

29は須恵器高杯。やや扁平な杯部に、退化気味の稜がみられる。稜下に櫛描波状文、脚部には台形状の透かし窓がみられる。外面底部1/3にヘラケズリ、内面底部にはナデが施される。口径16.5cm、器高11.0cm、裾部径10.6cm。確認トレンチ出土。古墳時代後期前半に属す。

30は須恵器甕。直線的に外方に広がる口縁部から、上方につまみ上げる端部。口縁部に2帯の櫛描波状文が施される。口径40.0cm。第7層出土。古墳時代後期後半に属す。

31・32は須恵器杯蓋。共につまみが付す形態。器高が浅い扁平な天井部から、わずかに下方につまみ出される口縁端部。奈良時代に属す。31は扁平な宝珠つまみが見られる。口径16.6cm。ⅡⅢ出土。32は天井部つまみ部欠損。口径17.6cm。第5層出土。

33は須恵器杯身。平底から直線的に外方に広がる口縁部。端部はやや尖り気味におわる。内外面共に底部にはナデが施される。口径15.2cm。第7層出土。奈良時代に属す。

34・35・38・39は須恵器甕。34はラッパ状に大きく広がる口頭部から、口縁端部は上下に拡張される。外面頸部にはハケメのちナデが施される。口径21.0cm。溝13出土。古墳時代後期後半に属す。35は直線的に外方に広がる口縁部から、端部は上方に面をもつ。口径22.8cm。第7層出土。奈良時代に属す。38は「く」の字形に外折する口頭部から、端部は下方に拡張する。外面頸部に2条の凸帯間に櫛描波状文、体部には平行タキが施される。内面体部には同心円文タキがみられる。口径22.3cm。落ち込み出土。39は大甕。なだらかに外折する口縁部から、端部は外方に面をもつ。外面口縁部付近に1条の凸帯がめぐる。口径51.0cm。北トレ、第5層出土。38・39共に古墳時代後期前半に属す。

37は脚部。37は高杯の脚部と思われる。なだらかに「ハ」の字形に広がる脚部から、そのまま外方に面をもつ。裾部径9.4cm。第7層出土。古墳時代後期前半に属す。

36は須恵器はそう。球形の体部に、肩部に1条の凹線文をめぐらし、1箇所には円形の透かし窓を施す。外面底部にヘラケズリが施される。第6層出土。古墳時代後期後半に属す。

40は土師器高杯。浅い椀型の体部から、口縁端部は上方につまみ上げる。外面底部付近に細かなハケメがみられる。口径13.6cm。ⅡⅢ出土。古墳時代後期に属す。

41は須恵器杯。平底から屈曲しながら立ち上がる体部。「ハ」の字形に広がる断面台形状の高台をもつ。底径8.0cm。第7層出土。

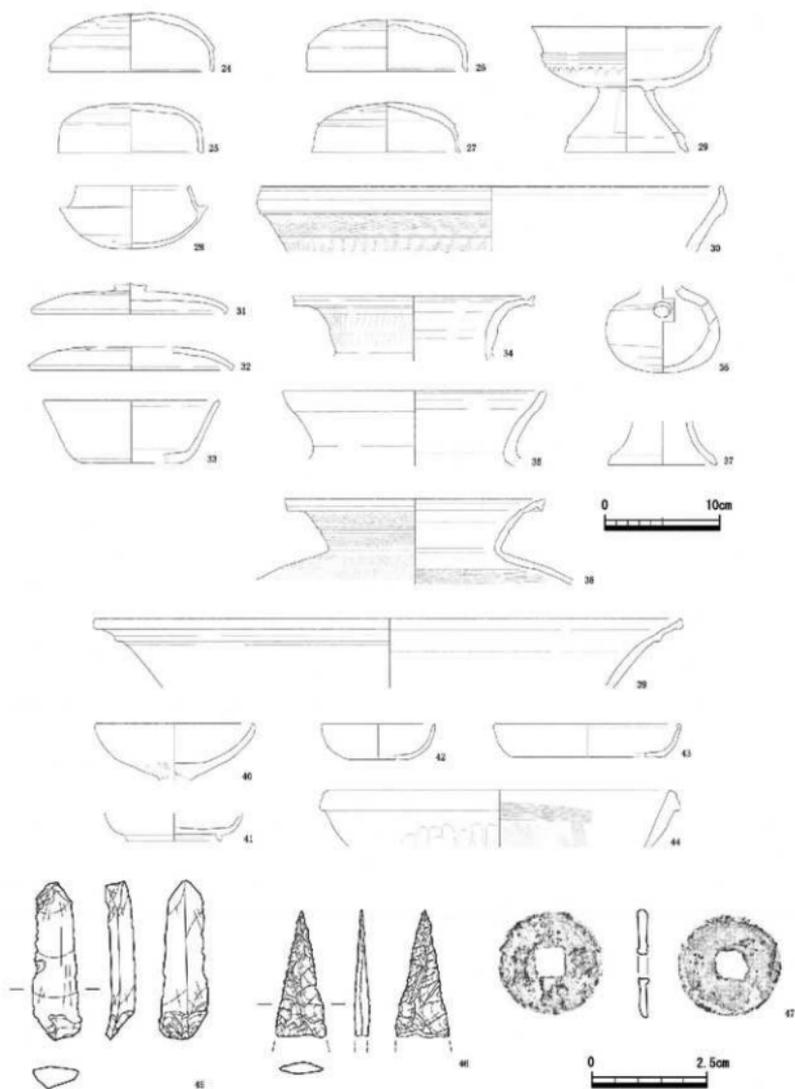
42は土師器杯。椀型の体部から、口縁端部は上方につまみ上げる。調整は外面ナデ、内面は風化の為調整不明。口径9.8cm。第7層出土。古墳時代後期に属す。

43は土師器皿。外弯気味に立ち上がる口縁部、端部は内折し丸く収める。口径16.0cm。Pg出土。奈良時代に属す。

44は和泉型の瓦質擂鉢。内面に細かなハケメ後摺目が施される。外面体部にはヘラケズリがみられる。口径29.6cm。第4層出土。空町時代に属す。

45・46はサヌカイト製の石製品。45は調整剥片。表面が著しく磨滅しているようにみられるが、風化しているとも考えられる。長さ3.45cm、幅1.0cm、厚さ0.5cm、重さ1.87g。溝Ⅱ下、第9層出土。弥生時代に属す。46は打製石器石鏃。基部が欠損している。先端部に磨滅がみられることから、石鏃から石錐に転用されたとも考えられる。長さ2.75cm、幅1.1cm、厚さ0.25cm、重さ0.69g。第9層出土。

47は古銭。表裏共に著しく錆が附着している。「元豊通宝」か。北宋銭。元豊年間(1078~1085)。長さ2.3cm、幅2.3cm、厚さ0.2cm。溝13上層内出土。中世に属す。



第15图 出土遺物実測図2

## 5) まとめ

今回の調査では、昭和21年の地震跡(断層・噴砂) - 南海道地震 -、室町時代後期から江戸時代前期(第1遺構)と、平安時代末期から鎌倉時代(第2遺構)にかけての耕作関連遺構と整地層・第4・5層 -、古墳時代後期から奈良時代の遺構(第3遺構)と整地層・第7層 - と古墳時代初頭と後期前半の溝(第4遺構)を検出した。

第1および第2遺構の溝は耕作に伴うもので、中世から近世にわたる時期はほぼ生産域であったようである。第3遺構では奈良時代の土坑などを検出したが、奈良時代の遺構および上層の整地層から奈良～中世にわたるの瓦が出土した。これは周辺域の調査においても出土しており<sup>21)</sup>、明確な状況は不明であるが、近隣にこれらの期間の寺院の存在が考えられる。

古墳時代初頭の遺構・遺物は、本調査地西方の近畿自動車道建設に伴う発掘調査において北部域で河川と井戸・土坑・落ち込み・土器溜りと2時期の遺構、南部域では水田跡が確認され、甕・壺・高杯・鉢・手焙形土器などの庄内式土器が多量に出土し、北方の都市計画道路大阪瓢箪山線の調査においても土器溜りと庄内式土器が検出されており<sup>22)</sup>、溝Ⅰ・Ⅱはこれらとの関係を窺わせ、この時期の集落の東南部への広がりが確認できた。

注1) ①『都市計画道路大阪瓢箪山線建設に伴う瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』財団法人東大阪市文化財協会 1999年、②『瓜生堂遺跡第46、47-1・2次発掘調査報告書』東大阪市教育委員会 2002年など。

注2) 『河内平野遺跡群の動態Ⅳ 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 北瀬跡群 弥生時代後期以降編 -』財団法人大阪府文化財調査研究センター 1998年。注1) ②。

## 〔追記〕

これまでの調査および確認調査において、届出の造成に伴う貯留施設工事の底面は弥生時代の集落関連遺構に達しないと判断して調査を終了させた。その後、埋設工事時に立会調査を実施して、調査対象域は完掘され、工事底面が弥生時代の遺構・遺物包含層相当レベルまでにも到達していないことを確認した(第16図)。



第16図 調査後の下水埋設工事状況(南より)



1. トレンチ南部東壁  
(西より)



2. 第1遺構完掘状況  
(南より)



3. 第1遺構完掘状況  
(北東より)

1. 第2遺構完掘状況  
(南より)



2. 第2遺構完掘状況  
部分 (西より)



3. 第2遺構完掘状況  
部分 (南西より)



図版3 瓜生堂遺跡第57次発掘調査 遺構

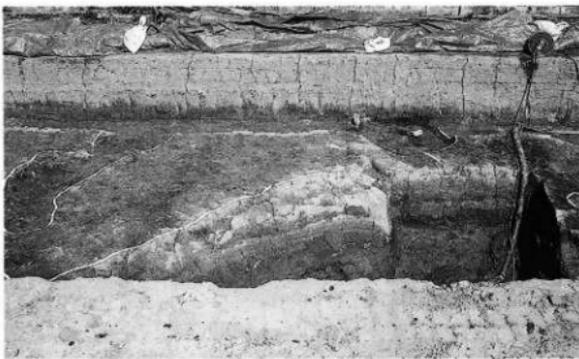


1. 第3遺構完掘状況（南より）



2. 第3遺構完掘状況（南より）

1. 第3遺構完掘状況  
部分 (西より)



2. 土坑I周辺状況  
(南より)

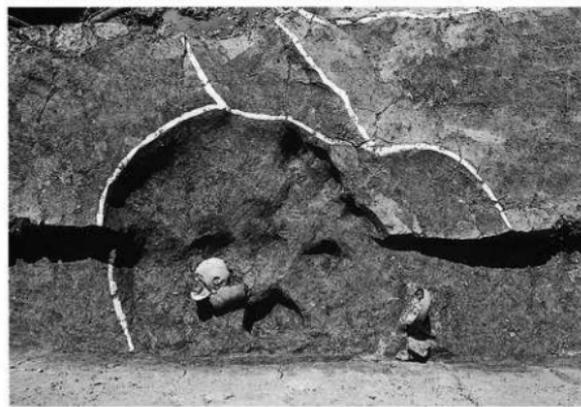


3. 土坑I断面  
(南より)





1. 土坑Ⅳ断面  
(南より)



2. 土坑Ⅱ・Ⅲ  
(東より)



3. 第3遺構完掘状況  
部分 (西より)

1. トレンチ北端東壁  
(西より)



2. 溝a完掘状況  
(北より)



3. 溝I内北部  
遺物出土状況  
(東より)





1. 溝Ⅰ内南部  
遺物出土状況  
(東より)

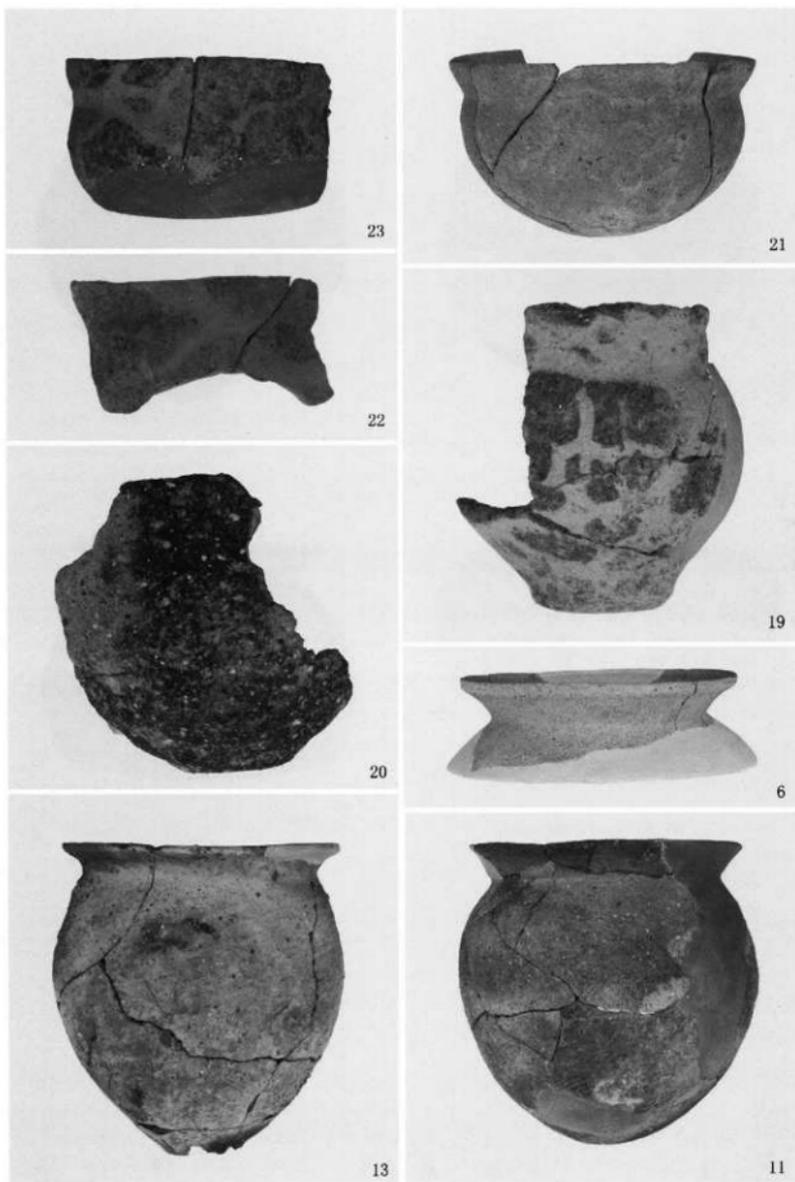


2. 溝Ⅱ内上部  
遺物出土状況  
(西より)



3. 溝Ⅰ・Ⅱ  
完掘状況  
(北より)

図版 8 瓜生堂遺跡第57次発掘調査 遺物



溝Ⅰ・溝Ⅱ出土 土師器 小型丸底壺・小型壺・小型鉢・甕

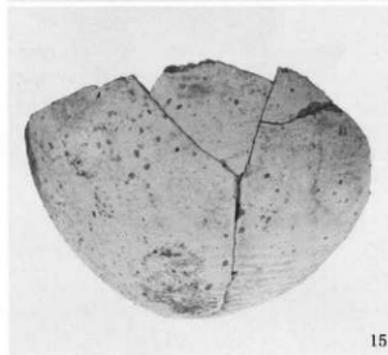
圖版 9  
瓜生堂遺跡第57次発掘調査  
遺物



5



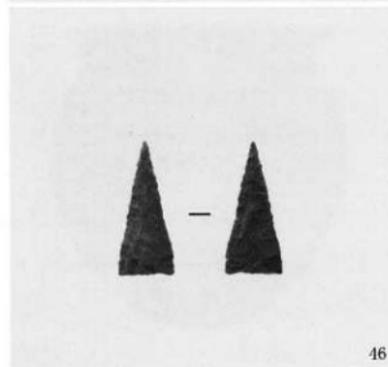
7



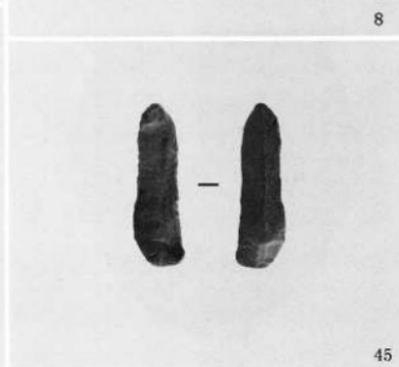
15



8

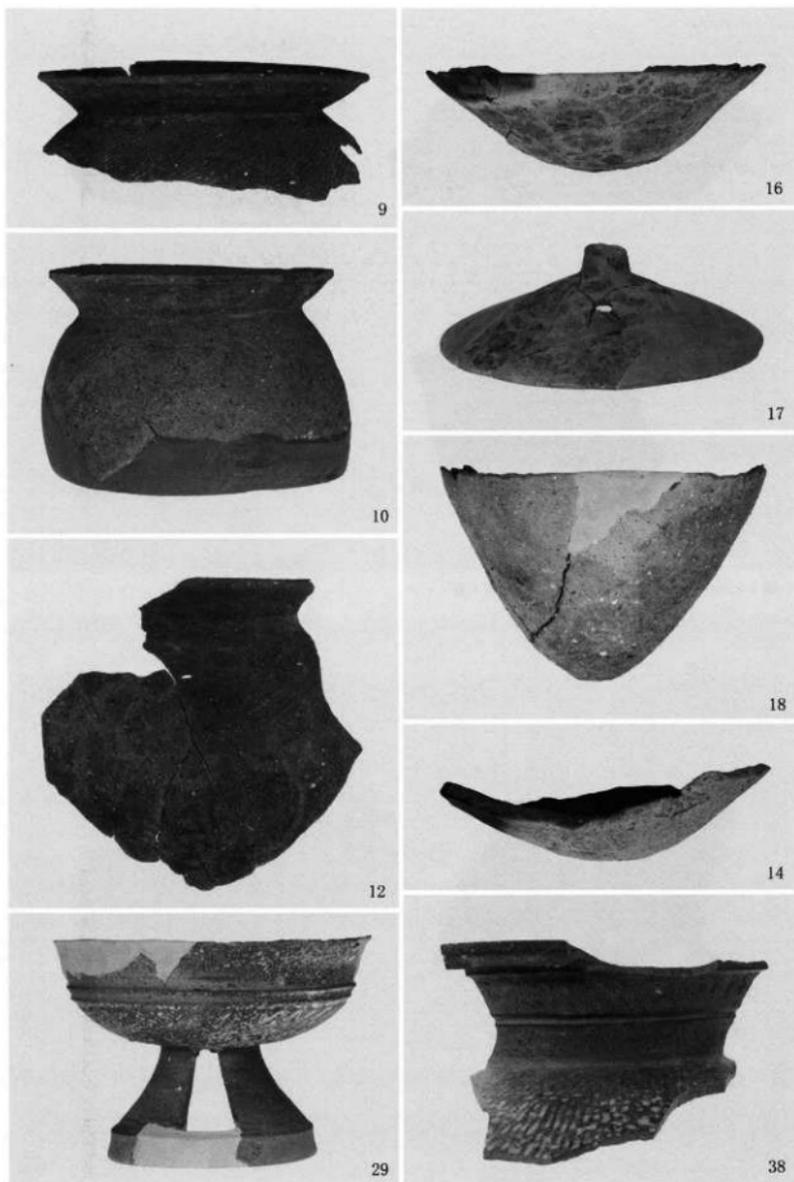


46



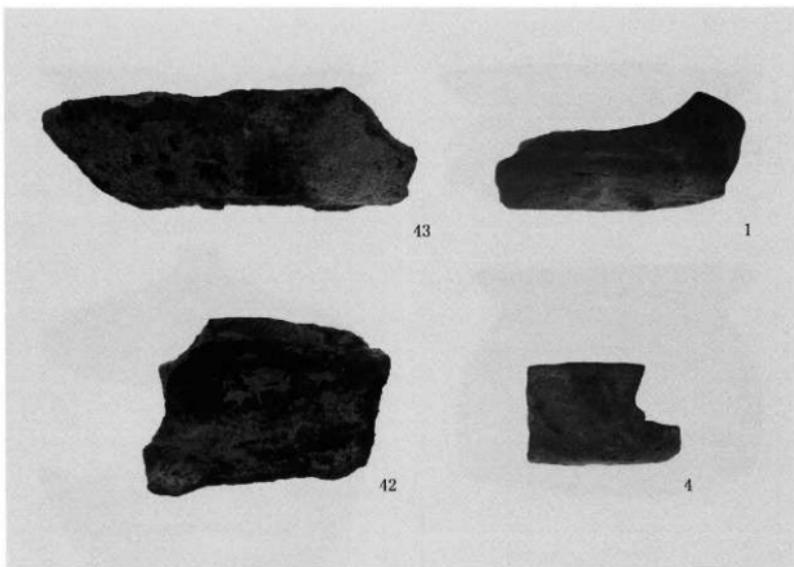
45

溝Ⅰ・溝Ⅱ・第9層出土 土師器 壺・甕、石鏃、調整利片

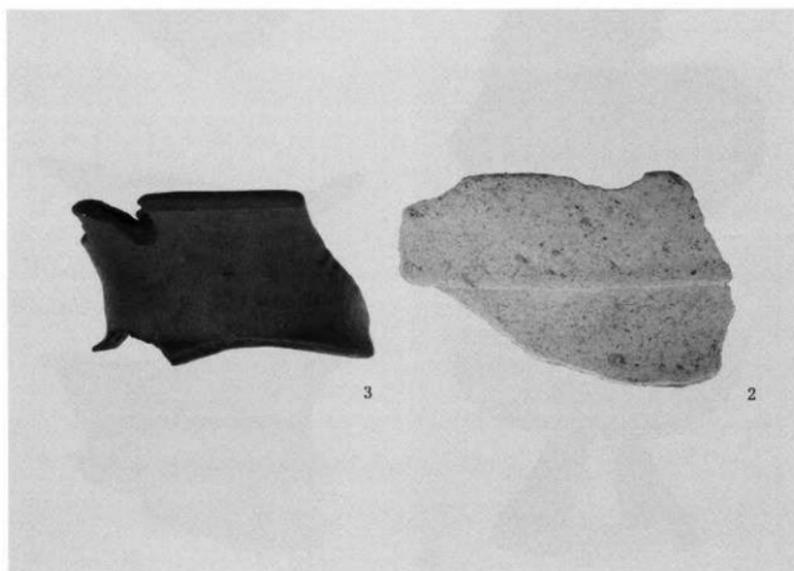


溝Ⅰ・溝Ⅱ・落ち込み・確認トレンチ出土 土師器 高杯・鉢・壺・甕、須恵器 高杯・甕

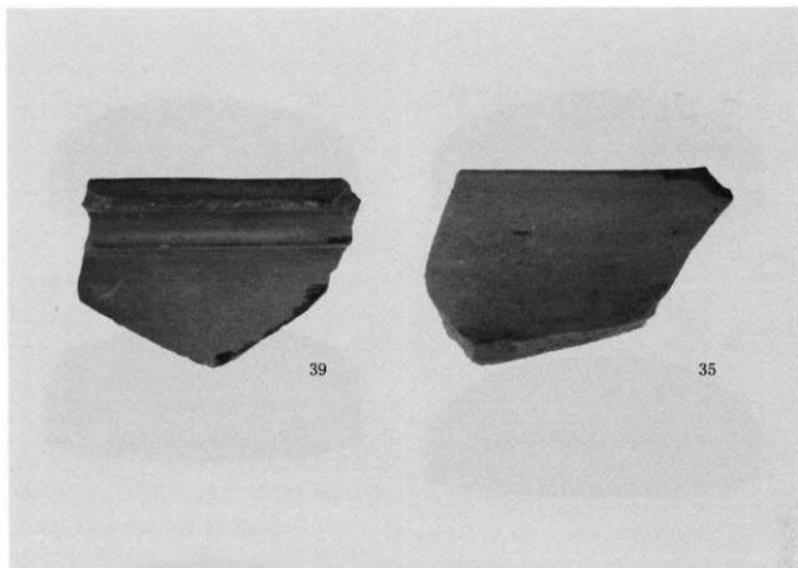
図版 11  
瓜生堂遺跡第57次発掘調査  
遺物



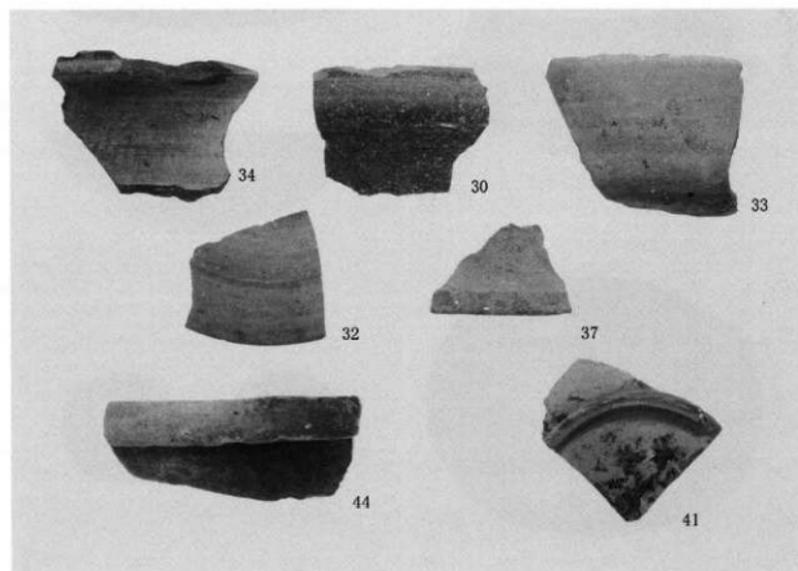
1. 溝Ⅰ・Pg・第7層出土 土師器 壺・皿・杯



2. 溝Ⅱ出土 土師器壺

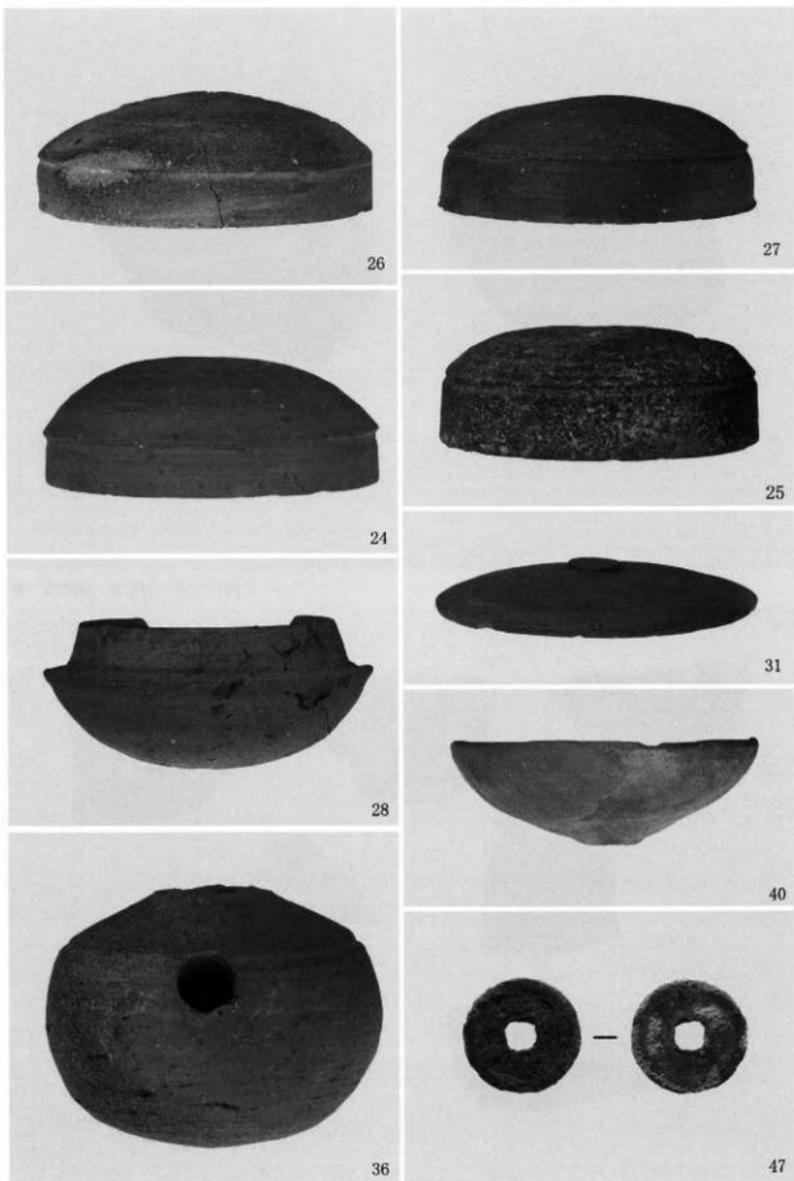


1. 溝13・第7層出土 須恵器 甕



2. 溝13・第4層・第5層・第7層出土 須恵器 杯・杯蓋・杯身・高杯・甕、瓦質土器 插鉢

図版 13  
瓜生堂遺跡第57次発掘調査 遺物



土Ⅱ・土Ⅲ・土Ⅳ・溝13・落ち込み・第6層出土 土師器 高杯、須恵器 杯蓋・杯身・はそう、古銭

## 第4章 新上小阪遺跡第2次発掘調査

### 1) はじめに

新上小阪遺跡は、東大阪市新上小阪に広がる弥生時代から中世期の集落跡である。遺跡は東西約320m、南北約220mの範囲と推定されている。遺跡は沖積低地にあり、旧大和川が形成した自然堤防状の微高地、現在の標高で3m前後に立地する。

新上小阪遺跡は近年の新発見遺跡である。平成11年に府営新上小阪住宅の建替に伴い、大阪府教育委員会が試掘調査を行った。その結果、本遺跡が弥生時代から中世期の集落跡であることが判明した。この結果をもとに、大阪府関連として府営住宅の高層化工事及び建替工事に伴う調査が4回、東大阪市担当で開発工事に伴う調査が3回(うち1回は遺構遺物の検出がなかったため回数なし)実施された。その調査成果については、別表にまとめたので参照いただきたい。

後述する今回の調査成果との関連で重要な点は、大阪府関連の調査で古代集落の東限が確定したことである。また府センター平成20・21年度調査の1区北部で古代の遺構が稀薄であることは、市1次調査のA地区北部で遺構遺物の検出がなかった点と符合する。また市1次調査では区画溝と想定されるSD1があり、古代集落が閉じた空間の中で営まれたことがわかる。古代集落の存続時期は、出土遺物の年代観から、8世紀前半から10世紀代と推定され、その後は耕作地に変化するようである。



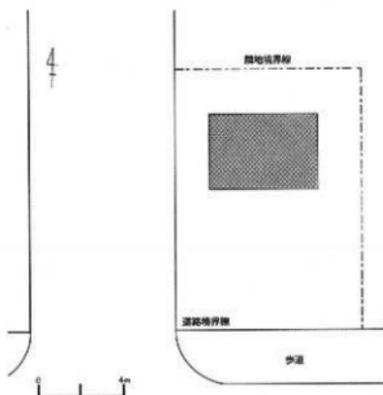
第1図 調査地位置図

第1表 新上小阪遺跡調査一覧表

主体	回数または調査年度	調査原因	調査期間	調査地	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査成果	報告書
大阪府関連	府センター 平成13年度	府営住宅 第1期建替工事	平成13年6月 ～平成14年3月	新上小阪	1516	古代の竪立柱建物。「村主」の墨書土器・緑地陶器・灰燼土器・瓦など出土。河内国若江郡の古代集落の一端が判明。	財団法人大阪府文化財センター 2003『新上小阪遺跡』
	府教委 平成15年度	府営住宅 第1期建替工事 (西水野留置工事)	平成15年6月 ～平成15年11月	新上小阪	1212	古代の竪立柱建物。府センター平成13年度調査の成果と併せて古代の屋敷地の範囲を推定。	大阪府教育委員会 2006『新上小阪遺跡』
	府センター 平成17・18年度	府営住宅 第2期建替工事	平成17年5月 ～平成18年9月	新上小阪	2535	弥生時代後期の竪穴住居・竪立柱建物。淡路の土器・瓦資料が出土。ただし古代の遺構は稀薄。	財団法人大阪府文化財センター 2007『新上小阪遺跡Ⅱ』
	府センター 平成20・21年度	府営住宅 民話プロジェクト	平成20年9月 ～平成21年6月	新上小阪	2937.2	弥生時代中期の方形周溝墓。古墳時代前期の竪立柱建物。古代の竪立柱建物。各時期の遺物出土。本遺跡の弥生時代中期の區域を推定。	財団法人大阪府文化財センター 2007『新上小阪遺跡Ⅲ』
東大阪市	(回数なし)	平成15年度 新小阪管渠築造工事	平成16年3月	新上小阪 228番地	3	立会調査。遺構・遺物ともに検出なし。	東大阪市教育委員会2005『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告-平成16年度-』
	1次	宅地造成	平成20年10月 ～平成20年11月	新上小阪 185-2番地	250	弥生時代後期の周溝遺構。古代のピット番・井戸ほか。本調査地が古代高落の縁辺部にあることを推定。	東大阪市教育委員会2009『新上小阪遺跡第1次発掘調査報告』
	2次	個人住宅建設	平成23年1月	新上小阪 185-18番地	17.5	(本書)	(本書)

平成23年1月、東大阪市新上小阪185番18において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。工事予定地は平成20年度に実施した市教委第1次調査A地区南に接した箇所にあたる。第1次調査の結果から、その調査原因となった開発工事の内部については、発掘調査を要しない基礎工法であったが、地盤の調査から、当該地のみ柱状改良工事が行われることになった。このため、届出者と埋蔵文化財の取扱いをめぐる協議を行い、事前の発掘調査を実施することになった。調査は平成23年1月24日から1月27日まで実施した。調査面積は17.5㎡であった(第2図)。

## 2) 調査の概要(第3図)



第2図 調査トレンチ位置図

発掘調査は、第1次調査A地区南の層序に準拠して遺物を包含しない第1層各層及び第2層を重機で除去したのち、第3層・第4層を人力で掘削して進めた。第4層上面と第5層上面については遺構面精査を行った。今回の調査で確認した層位は次のとおりである(第3図)。

第1層 旧耕土層ないし島島の埋土。土色・土質の相違から4層に区分した。

第1A層 青黒色(5B2/1)粗粒砂混じり粘土。

第1B層 暗青灰色(10BG3/1)粗粒砂混じり粘土。

第1C層 暗青灰色(5B4/1)シルト質細粒砂。

第1D層 青灰色(10BG5/1)シルト質細粒砂。

第2層 床土層ないし高畠畝の構成層。土色・土質の相違から2層に区分した。

第2A層 青灰色(5B5/1)粘土に褐色(7.5YR4/4)粗粒砂が混入。マンガン粒の沈着が著しい。

第2B層 褐色(7.5YR4/4)細粒砂に青灰色(5B5/1)粘土が混入。

第3層 灰色(5Y4/1)細礫混じりシルト。奈良～平安時代の遺物を含む。

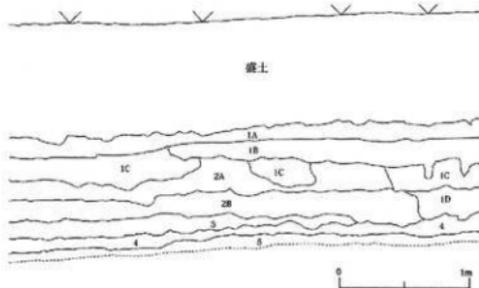
第4層 暗褐色(7.5YR3/3)シルト～シルト質粘土。古墳～平安時代の遺物を含む。

第5層 黒褐色(10YR3/1)粗粒砂。第1次調査A地区南ではこの層上面が奈良～平安時代の遺構面をなす。

第4層上面と第5層上面で精査したが、遺構は確認されなかった。第1次調査A地区南でもそれぞれの遺構密度は低く、それを裏付ける結果となった。また調査トレンチの南半は旧府営住宅の排水管による攪乱が第5層中部まで見られ、遺物も出土しなかった。



第3図 新上小阪遺跡の調査状況



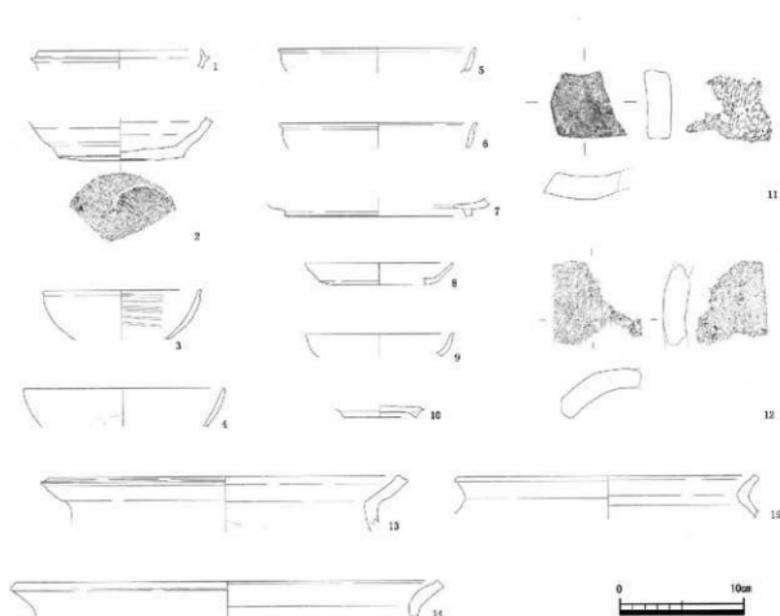
第4図 調査地北壁断面略測図

### 3) 出土遺物 (第5図)

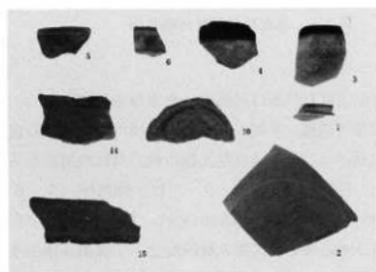
1は全面に自然釉がかぶった須恵器杯身。直立に短く立ち上がる口縁部に、水平な受け部をもつ。口径13.0cm 第4層出土。古墳時代後期に属す。2は壺の底部。平底。外面底部には明瞭な糸切り痕がみられる。底径10.2cm。第3層内出土。奈良時代に属す。3・4は黒色土器の椀。共に口縁部から体部に丸味をもつ。内面黒色を呈する。第3層内出土。平安時代に属す。5～7は土師器杯。5・6は口縁部がなだらかに外反し、端部はわずかに外方に外折する。共に口径16.0cm。7は「ハ」の字形にひろがる断面方形の高台をもつ底部である。底径14.2cm。5・6は第3層内出土。7は第4層出土。5～7は奈良時代～平安時代前期に属す。8・9は土師器皿、10は土師器椀。第3層内出土。8は直線的に外方に広がる口縁部に、端部は丸くおさめる。口径12.0cm。鎌倉時代に属す。9は丸味をもちながら立ち上がる口縁部に、端部はわずかに外折し、やや尖り気味におわる。口径12.0cm。10は「ハ」の字形にひろがる断面逆三角形をもつ高台。底径5.8cm。平安時代に属す。

11・12は瓦。第3層内出土。11は平瓦。布目痕をナデ消す。12は丸瓦。ナデ消されているが縄目痕が残存する。

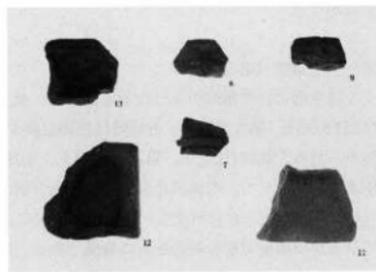
13・14は土師器甕。13は「く」の字形に外折する口縁部から、端部は外方に面をもつ。内面体部にはわずかにハケメが残存する。口径28.0cm。第3層内出土。14はなだらかに外反する口縁部から、端部は外方に面をもつ。口径34.0cm。第4層出土。共に奈良時代に属す。15は土師器羽釜。短く外反する口縁部に、端部は丸くおさめる。口径23.8cm。第3層内出土。鎌倉時代に属す。



第5図 出土遺物実測図



第6図 出土遺物写真(1)



第7図 出土遺物写真(2)

#### 4) まとめ

今回出土した遺物は、過去の第1次調査や府センター平成20・21年度調査分とほぼ同様の奈良～平安時代を中心とした時期に収まるが、鎌倉時代に属するものが数点出土しており、集落の存続時期に幅がある可能性がある。壁面の観察により、第4図に図示したように、調査地の東側には、遺物包含層を攪乱する島晶の埋土が広がっている。このため、今回の調査地より東側について、奈良～平安時代の集落が見つかる可能性は低いと考えられる。また、遺構面精査を2度行った結果、遺構は検出されなかった。限られた範囲であるが、今回の調査結果は、集落の縁辺東部の様相がうかがわれるものと考えられる。

## 第5章 上六万寺遺跡第12次発掘調査

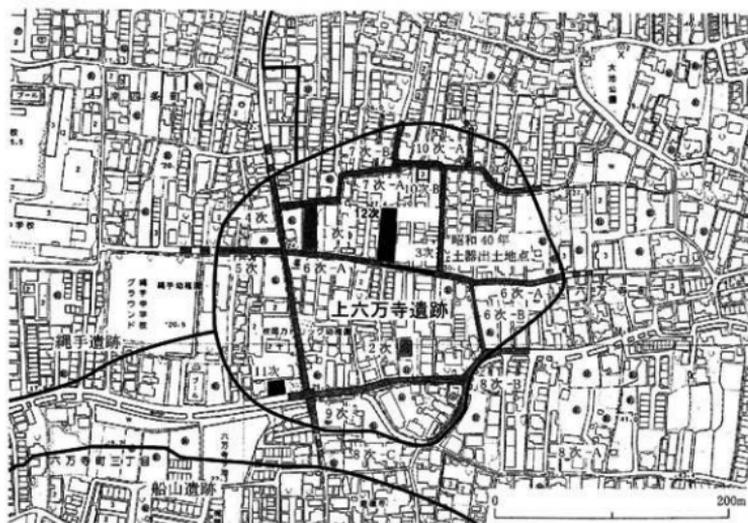
### 1) はじめに

上六万寺遺跡は、東大阪市上六万寺町の西部及び六万寺町三丁目にわたる弥生時代から中世期の集落跡であり、扇状地上、標高24～32mに立地している。

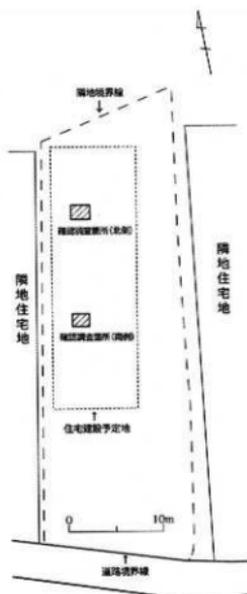
昭和48年に行われた宅地開発に伴う確認調査により、上層から鎌倉時代の石組井戸や溝、下層から弥生時代後期後半の土器が多数出土したことで、その存在が知られることとなった。特に下層より出土した一連の弥生土器は、都出比呂志氏により弥生時代後期後半に属する上六万寺式土器として設定された。これは、タタキ技法を駆使して成形した甕に特徴があり、受口状の口縁部をもつ鉢や口縁部が長めの高杯、細頸で扁平な球形の胴部の壺などの組み合わせによるもので、北鳥池遺跡下層出土土器の一段階前を代表する型式であると考えられている(都出1974)。上六万寺遺跡はその後、下水管理設工事や個人住宅建設に伴う小規模な調査が行われたのみであるが、学史に残る貴重な遺跡といえる。

### 2) 調査の経過

平成23年9月、東大阪市上六万寺町1967番1において、個人施工の共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。当該建築物の基礎工事は、柱状改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念されたため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。その後、平成23年9月22日に確認調査を実施した。調査の結果、北側地点において、弥生時代の遺物包含層を検出した。このため協議代理者と今後の取扱いについて協議を重ねた。最終的には、柱状改良杭の設計を変更し、再度届出が提出された。これは大阪府の取扱い基準に合致する設計への変更であったため、本市教育委員会による立会調査を実施した後、建築工事が行われた。



第1図 調査地位図



第2図 調査トレンチ位置図

### 3) 調査の概要

調査は重機を使用し、遺物が採集できるように、慎重に行った。調査で確認した南側地点及び北側地点の層位は、次のとおりである(第3図)。

#### 南側地点

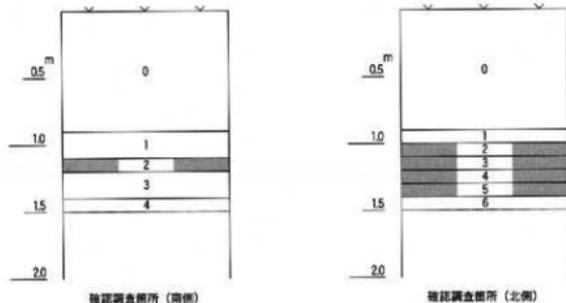
- 第0層 盛土層。
- 第1層 旧耕土層。
- 第2層 褐色 (7.5YR 4/3) シルト  
弥生土器片を少量含む。
- 第3層 黒色 (7.5YR2/1) シルト。  
5cm大の礫混じり。
- 第4層 黒色10YR1.7/1 シルト。

#### 北側地点

- 第0層 盛土層。
- 第1層 旧耕土層。
- 第2層 黒褐色 (10YR3/1) シルト。
- 第3層 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘土質シルト。
- 第4層 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト。  
3~5cm大の礫混じり。
- 第5層 黒色 (N2/1) 砂礫混じりシルト。
- 第6層 黒色 (2.5Y 2/1) 中~細粒砂。

南側地点第4層は湧水が著しく、それ以下の調査は不可能であった。北側地点第6層も同様に湧水が激しく、それ以下の調査は行っていない。

南側地点では、第2層が摩滅を受けた少量の弥生土器片を含む層である。北側地点で対応する層は確認できなかった。北側地点では、旧耕土層直下の第2層から第5層までの間で、弥生土器や弥生土器片が出土した。特に第4層からは、3~5cm大の礫と共に、残存状態の良い弥生土器甕が出土している。



第3図 試掘トレンチ柱状図

#### 4) 出土遺物

出土した弥生土器のうち凶化できたのは次の7点で、全て北側地点より出土した。

1～4は弥生土器甕。口径の大きさより2～4は中小型に属すると思われる。1～3はなだらかに外反し、口縁端部はやや丸くおさめる。4はわずかに「く」の字形に外折し、口縁端部に面をもつ。

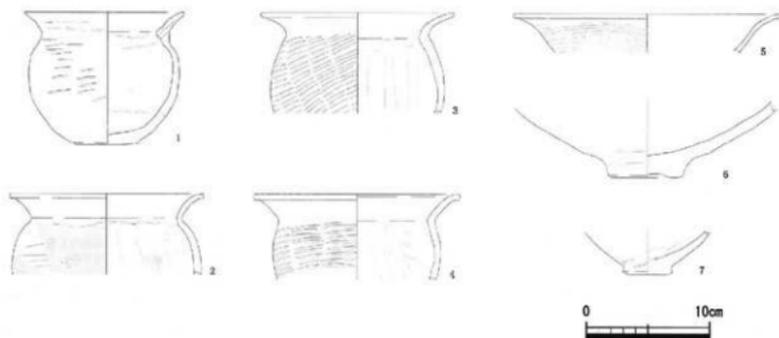
1は平底の底部。調整は外面に平行タタキがナデ消されており、一部に黒斑がみられる。内面は粘土接合痕がみられるが、調整は風化の為不明。小型の甕と思われる。色調は明赤褐色。口径12.8cm。在地産。NO.2地点②～⑤層出土。2の外面には平行タタキ後に細かなハケメ調整が施されている。内面はハケメ後ナデがみられる。色調は内面にぶい棕色、外面にぶい褐色。口径15.5cm。在地産。NO.2地点排土内出土。3は外面に密な平行タタキが見られ、一部ナデ消されている。内面にはナデ調整が施されている。内面口縁部から外面にかけて、煤が付着している。色調は内面褐色、外面黒褐色。口径15.2cm。在地産。NO.2地点排土内出土。4の外面には粗いタタキが施され、内面はナデ調整がみられる。一部に煤が付着している。色調は明赤褐色。口径16.6cm。在地産。NO.2地点排土内出土。

5はなだらかに外反する口縁部をもつ鉢である。外面に粗いヘラムガキが施され、内面は風化の為調整不明。色調は内面明赤褐色、外面にぶい赤褐色。口径21.2cm。在地産である。NO.2地点②～⑤層出土。

6は壺の底部と思われる。中央部がやや上げ底気味の底部から、丸味をもって広がる体部につづく。外面底部付近にハケメが残存する以外は、風化の為調整不明である。色調は明赤褐色。底径5.4cm。在地産。NO.2地点②～⑤層出土。

7は甕の底部と思われる。平底から内傾気味に立ち上がる体部。外面体部には平行タタキが施され、内面には板ナデ調整が見られる。色調は明赤褐色。底径3.8cm。NO.2地点排土内出土。

1～7の出土土器の時期は弥生時代後期に属す。



第4図 出土遺物実測図

## 5) まとめ

本章「1)はじめに」で述べたとおり、上六万寺遺跡では、過去には下水道工事や個人住宅建設のための小規模の発掘調査が行われたのみである。本確認調査地付近での過去の調査事例としては、南側に接する道路が、上六万寺遺跡第6次発掘調査のA地区に当たり、A-8地点及びA-10地点で立会調査が実施されているが、これらの地点においては、明確な遺構や遺物包含層は確認されていない。

以上を踏まえ、今回の調査の成果としては、ごく少量ではあるが、非常に残存状態の良い弥生土器や土器片が出土したことから、弥生時代後期後半における上六万寺遺跡の初期段階について新たな知見が得られたといえる。

### 【参考文献】

都出比呂志1974「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』20巻4号、考古学研究会。)

東大阪市教育委員会2002『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要 -平成13年度-』

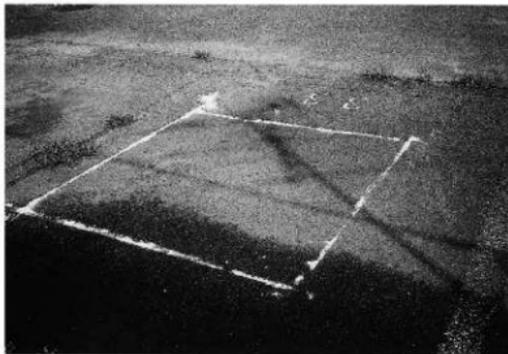
第1表 上六万寺遺跡の調査成果

次数	調査原因	実施期間	調査面積 ㎡	調査地	調査成果	報告書	年次
1	宅地造成に伴う規制	昭和48年10月23日 ～11月2日	24	上六万寺町132	鎌倉大～室町後期瓦葺、中世土器、二次堆積による弥生後期土器多数、弥生土器は後期後半の「上六万寺式」として型式改定。	『東大阪市文化財調査報告書』第2冊 1975	1975
2	共同住宅建設	昭和55年8月1日 ～8月24日	150	上六万寺町1412-C	弥生後期の竪穴住居跡、中世期の溝、弥生後期土器多数、奈良土師器・須恵器。	『馬場川遺跡・上六万寺遺跡・山崎6号墳調査報告』1981	1981
3	平成3年度下水道施設工事	平成3年11月5日 ～11月15日	50	上六万寺町1394	弥生後期土器、古墳前期土師器、河川用土～後期初段須恵器、奈良土師器・須恵器。	『東大阪市下水道発掘調査概報1991年度』1992	1992
4	平成10年度下水道管渠築造工事	平成10年6月18日 ～9月30日	100	南西条町、 六万寺町3丁E	縄文後期土器、弥生後期土器・土瓦、鎌倉後半～南北朝の遺物包含層。	『東大阪市下水道発掘調査概報1998年度』1999	1999
5	平成11年度下水道第28工区管渠築造工事	平成12年7月12日 ～8月1日	264	南西条町	奈良須恵器、鎌倉前期瓦葺少量。	『東大阪市下水道発掘調査概報 平成12年度』2001	2001
6	平成12年度下水道第29工区管渠築造工事	平成13年8月17日 ～10月12日	352	上六万寺町1394 ～1940	弥生中期～後期土器、古墳前期土師器、西後期土師器・須恵器、占代平瓦、土瓦。	『東大阪市下水道発掘調査概報 平成13年度』2002	2002
7	平成13年度下水道第43工区管渠築造工事	平成14年7月5日 ～8月26日	253	南西条町	弥生後期土器、古墳前期土師器、中世土器、瓦。	『東大阪市下水道発掘調査概報 平成14年度』2003	2003
8	平成14年度下水道第16工区管渠築造工事	平成15年5月1日 ～11月27日	242	上六万寺町14212 他	弥生後期土器、飛鳥須恵器、平安中期土師器、鎌倉瓦葺。	『東大阪市下水道発掘調査概報 平成15年度』2001	2001
9	平成15年度下水道第16工区管渠築造工事	平成16年1月14日 ～8月31日	232	六万寺町1丁目 1029他	中世土器。	『東大阪市下水道発掘調査概報 平成16年度』2005	2005
10	平成17年度下水道第101工区管渠築造工事	平成18年4月12日 ～9月4日	204	南西条町、上六万寺町	弥生後期土器、古墳中期土～後期初段土師器・須恵器、円筒埴輪、奈良～平安土師器・黒色土器。	『東大阪市下水道発掘調査概報 平成18年度』2007	2007
11	個人住宅建設(平成22年度国庫補助事業)	平成22年11月8日 ～11月10日	7.1	六万寺町3丁目 1387-S	平安朝開神降降陶器、鎌倉前期瓦葺少量。	『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報 平成22年度』2011	2011
12	個人所有の共同住宅建設(平成23年度国庫補助事業)	平成23年9月22日	7.1	上六万寺町1967-1	弥生後期土器。	本巻	2011

【調査成果】 ○○時代の時代、「検出」「州上」を省略。

【報告書】 調査者は「市教委」が東大阪市教育委員会、「文化財協会」が財団法人東大阪市文化財協会。署名も適宜省略している。

1. 調査前状況（南西から）



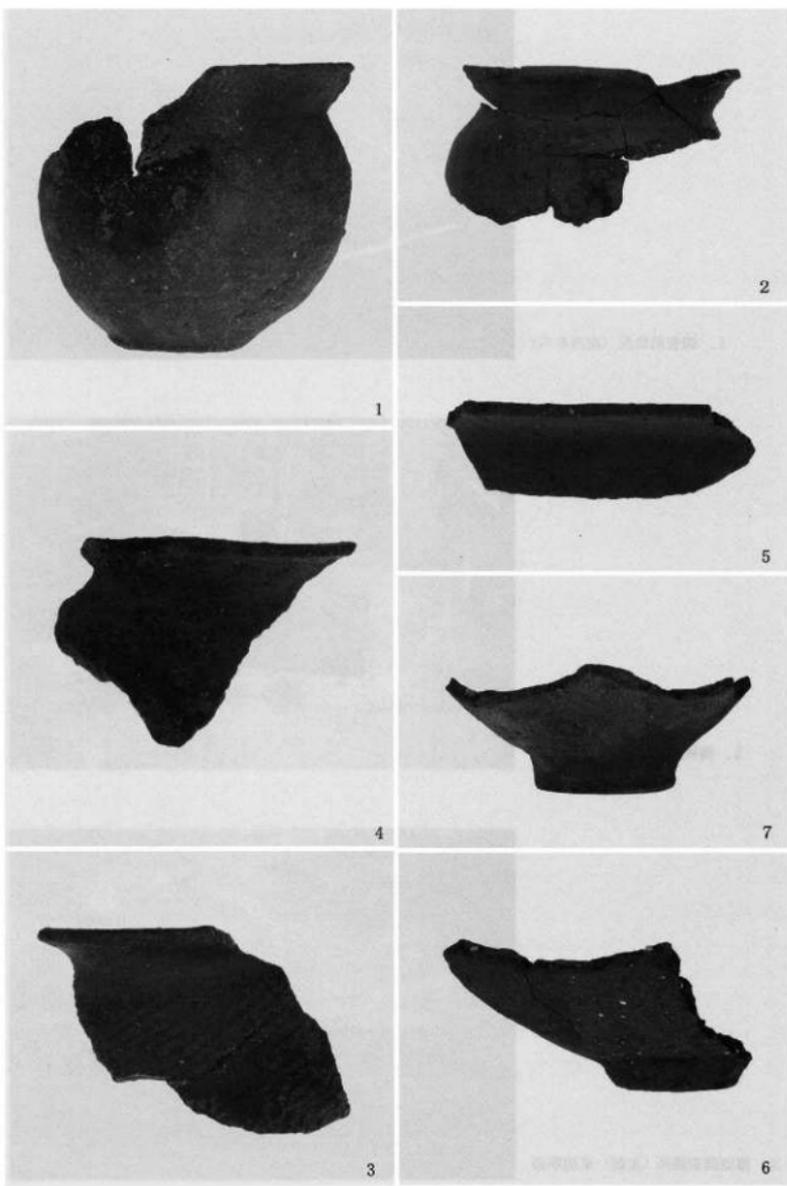
2. 機械掘削の状況（北から）



3. 確認調査箇所〔北側〕東側断面



図版 2 上六万寺遺跡第12次調査 遺物



各層出土 弥生土器 甕・鉢・甕

## 報告書抄録(その1)

ふりがな	ひひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはくつちようさがいほう -へいせい23ねんど-
書名	東大阪市埋蔵文化財調査概報 -平成23年度-
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	菅原章太・若松博恵・仲林篤史・松田直子(株式会社地域文化財研究所)
所在地	〒577-8521 東大阪市荒本北一丁目1番1号
発行年月日	2012年3月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	調査期間	調査 面積	調査原因
はなくさやまこぶんぐん 花草山古墳群	東大阪市上四条町 1422番地	27227	73	平成22年 10月25日～ 11月16日	82㎡	埋蔵文化財 有無確認
しんかみこさかいせき 新上小阪遺跡	東大阪市新上小阪 185-18番地	27227	163	平成23年 1月24日～ 1月27日	17.5㎡	個人住宅 建設
うりうどういせき 瓜生堂遺跡	東大阪市瓜生堂 1丁目 34-4、34-6、 204、205番地	27227	95	平成23年 7月14日～ 8月12日	135㎡	個人貯留槽 建設
かみろくまんじいせき 上六万寺遺跡	東大阪市	27227	82	平成23年9月22日	5㎡	個人住宅 建設

## 報告書抄録(その2)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
花草山古墳群 (第3次調査)	古墳	古墳時代	19号墳 横穴式石室 墳丘	須志器 土師器 刀子 玉	
新上小販遺跡 (第2次調査)	集落跡	弥生時代 ～中世	(遺物包含層)	須志器 土師器 黒色土器	
瓜生堂遺跡 (第57次調査)	集落跡 その他の墓	弥生時代 ～室町時代	地震跡 溝、土坑 ピット	土師器 須志器 瓦器 古銭 石器	
上六万寺遺跡 (第12次調査)	集落跡	弥生時代 ～室町時代	(遺物包含層)	弥生土器	

### 東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

—平成23年度—

発行日 平成24年3月31日  
 編集・発行 東大阪市教育委員会  
 〒577-8521 東大阪市荒本北一丁目1番1号  
 TEL.06-4309-3283  
 印刷所 グラント印刷(株)

